

Japan
Audio
Society

JAS

journal

平成23年7月1日発行
通巻410号
発行 日本オーディオ協会

2011
Vol.51 No.4

7

- 2011 年度サラウンドの日体感視聴会報告 小谷野 進司
- 富田 勲氏による 名古屋芸術大学 公開講座
「作曲におけるサラウンドと未来」について 長江 和哉
- マイ ジャケット コレクション 鈴木 秀夫
- 今年 30 周年を迎えたドイツのハイエンド・ショー
未だ、真空管アンプやアナログレコードが現役で活躍
ここはまさにオーディオ界のガラパゴスだ！
ドイツ、ミュンヘン High End 2011 レポート 森 芳久
- 連載「試聴室探訪記」第 6 回
～谷口ともりの、魅惑のパノラマ写真の世界～
パイオニアプラザ銀座 森 芳久・谷口 ともりの
- 連載：テープ録音機物語
その 56 ステレオ・テープデッキ (4)
— 国内のメカだけのデッキ — 阿部 美春
- JAS インフォメーション
 - 2011 年度 通常総会報告・5 月度理事会報告
 - 協会事業関連資料集
 - ・1 平成 22 年度事業報告書
 - ・2 平成 22 年度収支計算書
 - ・3 平成 23 年度事業計画書
 - ・4 平成 23 年度収支予算書
 - ・5 平成 23 年度役員名簿
 - ・6 平成 23 年度協会組織図
 - ・7 定款
 - 東日本大震災支援について



一般社団法人

日本オーディオ協会



12月6日
音の日

C O N T E N T S



(通巻 410 号)

2011 Vol.51 No.4 (7月号)

発行人：校條 亮治

一般社団法人 日本オーディオ協会

〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9

電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207

Internet URL

<http://www.jas-audio.or.jp>

3	2011 年度サラウンドの体感視聴会報告	小谷野 進司
8	富田 勲氏による 名古屋芸術大学 公開講座 「作曲におけるサラウンドと未来」について	長江 和哉
12	マイ ジャケット コレクション	鈴木 秀夫
18	今年 30 周年を迎えたドイツのハイエンド・ショー 未だ、真空管アンプやアナログレコードが現役で活躍 ここはまさにオーディオ界のガラパゴスだ！ ドイツ、ミュンヘン High End 2011 レポート	森 芳久
	-連載「試聴室探訪記」第 6 回-	
27	～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～ パイオニアプラザ銀座	森 芳久・谷口 とものり
	-連載：テープ録音機物語-	
29	その 56 ステレオ・テープデッキ (4) 国内のメカだけのデッキ	阿部 美春
	-JAS インフォメーション-	
38	2011 年度 通常総会報告・5 月度理事会報告 協会事業関連資料集	
40	・1 平成 22 年度事業報告書	
42	・2 平成 22 年度収支計算書	
43	・3 平成 23 年度事業計画書	
46	・4 平成 23 年度収支予算書	
47	・5 平成 23 年度役員名簿	
48	・6 平成 23 年度協会組織図	
49	・7 定款	
59	東日本大震災支援について	

7月号をお届けするにあたって

6月9日に開催された、一般社団法人として最初の定時総会で承認された定款や事業計画のもとに日本オーディオ協会の新たな活動がはじまりました。総会で承認された事業関連資料を JAS インフォメーションに掲載しました。

本号では「サラウンドの日」を中心に開催された体感視聴会の総括をサラウンドサウンド部会 小谷野進司主査に、また、関連イベントとして開催された「富田勲氏による名古屋芸術大学公開講座の様子を名古屋芸術大学 音楽学部の長江和哉先生にご寄稿いただきました。

会員をご紹介する記事を増やしたい主旨で、相澤宏紀監事と森芳久理事のご協力をいただき、音楽ソフトの印刷附属品を手がける鈴木秀夫様にご執筆いただきました。会員の皆様の音楽・オーディオとのかわりや近況のご投稿をお待ちします。

『試聴室探訪記』は、オーディオメーカー、輸入代理店、販売店、個人の試聴室探訪記を連載しますので、自薦、他薦の取材お申し出をお待ちします。また、この記事の感想、ご意見を編集事務局までお寄せ下さい。宛先は jas@jas-audio.or.jp で、はじめに「編集事務局宛て」と明記してください。

日本オーディオ協会は会員会社の協力のもとに、震災で被災された小、中学校にオーディオ機器や CD を提供する活動を進めています。提供先で活用される様子を JAS インフォメーションでご覧ください。

編集事務局

編集委員

(委員長) 君塚 雅憲 (委員) 伊藤 昭彦 ((株) ディ・アンド・エムホールディングス)・大林 國彦・

蔭山 恵 (パナソニック (株))・川村 克己 (パイオニア (株))・豊島 政実 (四日市大学)・

瀨崎 公男 (日本放送協会)・藤本 正熙・森 芳久・山崎 芳男 (早稲田大学)

2011 年度サラウンドの日体感視聴会報告

DHT サラウンドサウンド部会主査 / パイオニア (株)

小谷野 進司

3月11日に発生した東日本大地震につきましては被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

今回の震災は各方面に多大な被害を及ぼし、日常生活から経済活動まで広範囲な影響を及ぼしました。当業界に於きましても、生産、販売、流通に被害を受けた企業もあり、開催が危ぶまれる中で実施されたサラウンドの日体感視聴会ですが、幸いにも会員企業や関連団体のご協力により、多くの方々にサラウンドやホームシアターの楽しさを体験して頂くことができました。

1. 「サラウンドの日」について

JEITA と日本オーディオ協会は、サラウンドサウンドやホームシアターの普及、啓発に向けて活動を行ってまいりましたが、一般の方々に対しての認知を高めるために、2008年に5.1chに因んで5月1日を「サラウンドの日」として制定しました。以来、4月、5月を中心に「サラウンドの日体感視聴会」イベントとして、会員企業やサラウンド関連団体、放送事業者等により全国各地で様々な体験会を開催しています。



サラウンドの日シンボルマーク



体感視聴会ポスター

2. 実施概要

2011年度は震災の影響から、ショールームの一時閉鎖やイベント自粛の動きがあり、どこまでの規模を維持できるか懸念がありました。さらに、例年5月連休中に開催されているNHKの「渋谷DEども」会場でのホームシアター体験コーナーが開設されず、例年5000人以上の来場者が期待されただけに残念なことになりました。このため、NHK制作のサラウンド体験デモディスクの提供が行われず短時間でサラウンドの魅力を知らしめる効果的なツールが使えない状況と

なりました。しかし、DEG ジャパンからは昨年につき DEG ジャパンアワード受賞作品から 3 作品の使用許諾を頂き、各会場でデモソースとして活用することが出来ました。このような状況下で 8 社、4 団体の参加に加えパイオニア、ヤマハ、オンキョーの 3 社による合同体験会が初めて開催されるなど、サラウンドの日体感視聴会開催期間中、各会場合計で延べ 5000 名を越える方々にサラウンドやホームシアターを体験頂きました。この数字は昨年の NHK を除く一般来場者数を大幅に上回っています。

参加企業・団体	実施日	開催場所
パイオニア	4月末～5月31日 5月26日	パイオニアプラザ銀座
ソニー	4月23日～5月29日	ソニービル銀座 ソニーストア大阪 ソニーストア名古屋
パナソニック	5月7, 8, 14, 15日	パナソニックセンター大阪
パナソニック電工	4月中旬～5月31日 5月28, 29日	汐留ショールーム
ヤマハ	5月14日 5月21日 5月22日	名古屋 東京 大阪
ヤマハスタインバーグ	5月25日 5月27日	ヤマハ大阪事業所 旧ヤマハ渋谷店
D&Mホールディングス(デノン)	5月13日	デノン銀座音楽倶楽部
名古屋芸術大学	5月12日	名古屋
ヤマハ・パイオニア・オンキョー合同	5月22日	大阪ヤマハ研修センター
エムズシステム	4月29日～5月2日	新富町本社
サイデラ・パラディソ	5月2, 9, 16, 23, 30日	神宮前スタジオ
神戸電子専門学校	4月29, 30日	神戸
国立音楽院	5月1日	三軒茶屋

各会場実施状況



＜パナソニックセンター大阪会場＞
ホームシアター体験会



＜ソニーストア大阪会場＞
サラウンドの日体感視聴会



＜パイオニアプラザ銀座会場＞
富田勲が語る「惑星」・「源氏物語」の世界



＜ヤマハ大阪会場＞
ヤマハ NEW リビング・オーディオ体験会



＜DENON 銀座音楽倶楽部会場＞




＜名古屋芸術大会場＞
公開講座「作曲におけるサラウンドと未来」



＜神戸電子専門学校会場＞
「タイム・トラベル・トラジェディ」

国立音楽院
サラウンドの日
3D音響による生徒作品発表会

東京大学で研究された音響、心よりお楽しみ申し上げます。
国立音楽院で「サラウンドの日」イベントも、今年4回目となりますが
今年も規模を拡大し、生徒作品発表会として参加します。



SURROUND SOUND

プログラム（予定）
・2010年度生徒作品発表
・卒業生作品紹介
・レクチャー「音楽へのサラウンド発展、視覚的効果」

※サラウンドの日とは
一般に個人電子音響技術者協会主催のサラウンドの日とは異なり、サラウンドの音場と音質
を目的としたサラウンドの日を「サラウンドの日」とさせていただきます。会場も東京から神戸に
変更されます。

※本日は「サラウンド音響録音3Dの作品発表」も予定
【国立音楽院】「3D音響」は「音場」を「作り出す」ことが目的です。サラウンドの音場と音質
を目的としたサラウンドの日を「サラウンドの日」とさせていただきます。会場も東京から神戸に
変更されます。

2011年5月1日(日)14:00～15:45を予定
国立音楽院 本館2階 レクチャー3 入場無料

入場の際、会場入り口にて参加者名簿の裏面に参加者を認めるご記入をお願いします。
プログラム会場、聴衆の保護のため、火気にはお気をつけてください。あらかじめご了承ください。

＜国立音楽院会場＞
3D音響による生徒作品発表会

各会場の参加者からは

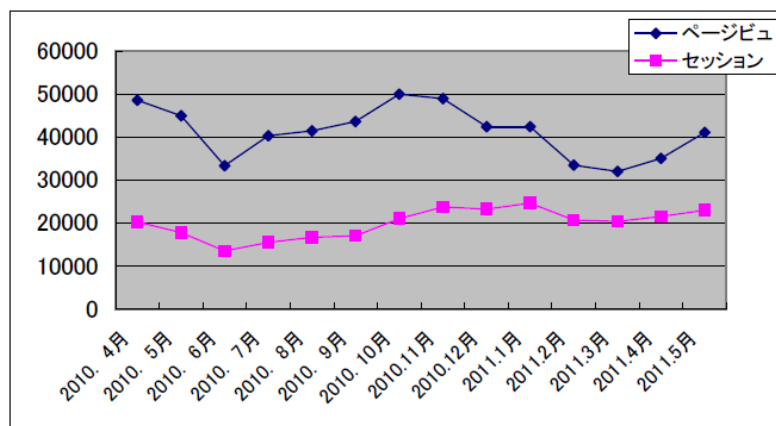
- ・「サラウンド」「5.1ch/7.1ch」という言葉の意味がよく理解できました (30代男性)
- ・7.1chのデモ映像がすごかった。まるでその場にいるかのような感覚になった (30代女性)
- ・ピュアオーディオ筋だったが、マルチチャンネルにも興味を持った (50代男性)
- ・フロントサラウンドでも、十分に臨場感を感じる (40代男性)
- ・初めてサラウンド音楽を聞きました。音楽自体の立体感がとても興味深かったです。(20代女性)
- ・音の世界にこんなに魅き込まれた経験は初めてでした。サラウンドにはまってしまいそうです!! (20代女性)
- ・爆発の時に、本当に部屋が振動しているようで、サラウンドの迫力がすごいと思いました! (20代女性)

などの声が寄せられました。

このように開催前の危惧とは裏腹に各会場とも多くの参加者を得て、熱気のこもった体験会を催すことができました。

3. ホームシアターサウンド

ホームシアターを広く知って頂くことを目的に 2010 年 4 月より従来の surround.jp を全面改定したホームシアターサウンド (<http://hometheater-s.jp>) を立ち上げ、コンテンツの充実に合わせてきました。Web でのアクセス数の多さがサイトの人気の指標となりますが、開設以来 40000 ページビュー、20000 セッション数を維持し、Google では「ホームシアター」の検索で上位 20 に入ってきております。しかし、人気サイトとしてはさらに多くのアクセス数を確保することが求められています。コンテンツについては「今月のおすすめソフト」をソフト会社の協力を受け毎月更新、「ホームシアターを作る」のコーナーではホームシアター初心者に対して機器選定の指標となる情報の提供やメーカーリンクによる機器検索の利便性の提供、さらに、JEITA SS 専門委員会と JAS SS 部会各委員による「コラム」の連載、「音を 10 倍楽しむ」や「豆知識」コーナーの充実、放送事業者からのサラウンド番組情報提供、さらに SEO 対策や見やすさのためのレイアウト変更など、より使いやすい、使って頂けるサイトを目指し内容の充実に向けています。



アクセス数の推移

4. サラウンドサウンド普及に向けて

以上のような活動を通じてホームシアターおよびサラウンドサウンドの普及拡大に努めておりますがまだまだ認知が不十分な現状があります。

日本オーディオ協会デジタルホームシアター委員会では、「デジタルホームシアター取り扱い技術者資格認定制度」(<http://www.jas-audio.or.jp/dht/>)を設けエンドユーザーに向け正しいアドバイスが出来る人材育成を行っています。今後、資格取得者を通じて市場活性化が図れることを期待しています。

hometheater-s.jp については初心者や新規ユーザーの取り込みを図るべく、ホームシアター関連の情報源として「見てもらえるサイト」を目指し、さらに内容を充実させる必要があります。また、メーカー、ソフト、放送、流通関係者に対してはさらなる協力をお願いし使いやすい機器の開発や、サラウンドコンテンツの充実、体験の場の提供等を充実し一般ユーザーへの普及を図ることが求められます。

7月24日以降の完全デジタル放送化を機会にさらなる市場拡大に向けた活動を行ってまいりますので皆様方のご協力をよろしくお願い致します。

筆者プロフィール

小谷野 進司 (こやの しんじ)

1952年生まれ。1975年東京電機大学電子工学科卒。

同年パイオニア(株)入社。

スピーカの設計、開発を経て、同社総合研究所にてオーディオ関連研究に従事。2005年よりオーディオの普及と教育活動を開始。

現在同社コーポレートコミュニケーション部広報企画課副参事。

趣味は合唱、お囃子。



サラウンドの日関連イベント

富田 勲氏による 名古屋芸術大学 公開講座

「作曲におけるサラウンドと未来」について

名古屋芸術大学 音楽学部 音楽文化創造学科

サウンド・メディア選択コース 講師 長江 和哉

本コースについて

名古屋芸術大学 音楽学部 音楽文化創造学科 サウンドメディアコースは、2001年に今までにない新しい発想をもとに音楽大学の中に設置されたコースです。

作曲・録音・音響を教育の核にしなが、様々なジャンルの音楽や、サウンドを形成している分子としての「音」そのものについて学んでいっています。また、音楽的、あるいは芸術的にすぐれた音とは何かを考察する能力を養い、多彩なジャンルで活躍するクリエイターや、アーティスト的な発想を持ったエンジニアなどの人材の育成を目指しています。

本学には、SSL 4000G+と Digidesign Pro Tools HD を核にしたスタジオがあり、2005年からは授業でサラウンドでの音楽制作にも取り組んでいます。

今回はさまざまな縁があり、世界的な作曲家でこれまでに多くのサラウンドによる音楽表現を行ってきた富田 勲先生の公開講座を実現することができました。



名古屋芸術大学スタジオ

公開講座について

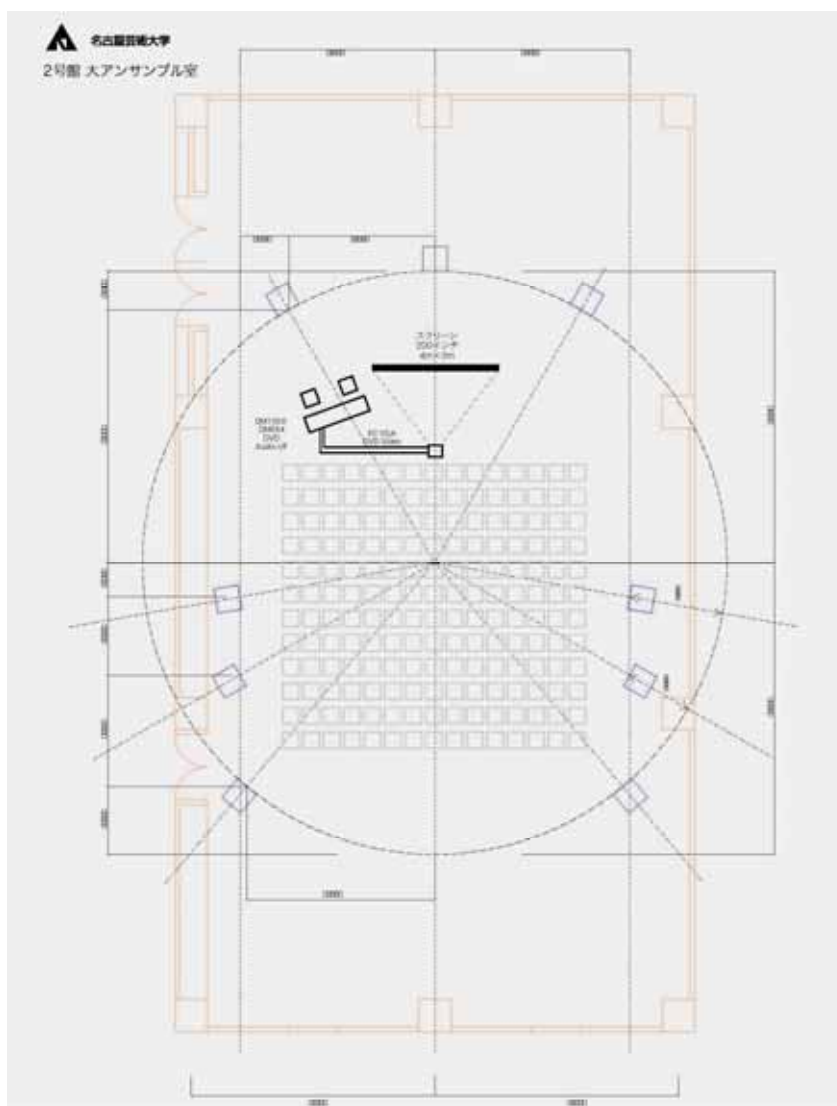
2011年5月12日(木)16:00より名古屋芸術大学東キャンパス2号館 大アンサンブル室において、公開講座「作曲におけるサラウンドと未来」を行いました。早い時期よりサラウンドによる音楽表現を行ってきた富田 勲先生をお招きし、作曲におけるサラウンドについてや、サラウンドの魅力について、これまでに制作した楽曲をサラウンド再生しながら講義いただきました。

今回の講座でのサラウンド再生は、ヤマハ株式会社 PA 事業部 マーケティング部 CA 国内セー

ルスクール名古屋の機材協力のもと、本学講師の岡野 憲右氏とサウンドメディアコース 4年生の学生が担当しました。



公開講座「作曲におけるサラウンドと未来」会場



会場でのスピーカーセッティング図

富田 勲先生の講義の導入部では、幼少期に過ごした中国・北京の天壇公園「回音壁」での音響体験を発端に、立体音響へ興味を抱いたとのお話を頂きました。

また、NHKと一緒に取り組んだBSハイビジョン特集「仏法僧に捧げるシンフォニー 鳳来寺山 63年の再訪」では、台風が迫る中、録り直しができない状況下での収録の苦労など、撮影秘話を交えた解説に、会場を埋めた学生は興味深く聴き入っていました。

さらに、1975年にリリースされた、「展覧会の絵」から、「卵のからをつけたひなの踊り」をDAW、Steinberg Nuendoのミキサー画面を見ながらサラウンドで試聴。モーグ・シンセサイザーで表現された「ネコ」「ニワトリ」「ヒヨコ」の3つのキャラクターが前後左右にめまぐるしく移動することで、追いつ追われつの様子が再現され、サラウンドならではのユーモラスな表現に会場が沸きました。

続いて、「惑星(プラネッツ) Ultimate Edition」より「火星」「木星」を試聴。解説では、昨年(2010年)話題となった小惑星イトカワの探査機はやぶさの地球帰還といった快挙に触れ、親交の深かった日本の「宇宙開発・ロケット開発の父」と呼ばれる糸川英夫博士との思い出話を交えた心温まるエピソードも披露。また、サウンド面ではピンクノイズから独自の音を作り出す手法について詳しく説明されました。

後半では、先生の最近の作品より「源氏物語幻想交響絵巻」や「交響詩ジャングル大帝」などを題材に、最新のサラウンド音響の表現方法やその有効性を解説。

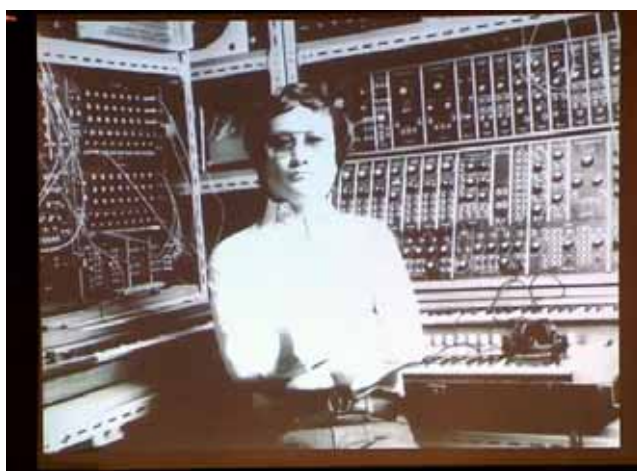
また、尚美学園大学大学院 富田研究室の研究者 津田 賢吾氏より、サラウンド版の「ジャングル大帝 2009」の中の「船に積まれて」の冒頭の貨物船が港を出航するシーンで実際に使われた、横浜港でのフィールドレコーディングについて、映像を交えて分かりやすく説明いただきました。

最後に、聴講する音楽を学ぶ学生に向け、子ども達が目を輝かせるような、誰にでも分かりやすいサラウンドの実現を目指して欲しいという言葉を添え、講座を締めくくられました。

本講座を聴講した学生の中から、先生の意志を継ぐ人が現れることに期待したいと思います。



富田 勲先生の講義



シンセサイザーと富田 勲先生

まとめ

今回の公開講座では一般の方々の参加や、多数の放送・舞台関係の方々の参加もありました。お忙しい中、来学頂きまして感謝申し上げます。また、本学学生のために、講義頂きました富田勲先生にあらためて感謝申し上げます。今後ますます、サラウンドが一般に普及して、音楽と音の感動体験が広がることを願ってやみません。

筆者プロフィール

長江 和哉 (ながえ かずや)

1996年名古屋芸術大学音楽学部声楽科卒業後、
録音スタジオ勤務を経て、2006年より名古屋芸術大学
音楽学部音楽文化創造学科 専任講師。

サウンドメディア選択コースで録音の授業を担当。

AES (Audio Engineering Society) 日本支部 会員



マイ ジャケット コレクション

株式会社 サン・ジャケット

鈴木 秀夫

レコードとのかかわり

子供の頃から自宅に有った手回し式の蓄音機で、父の集めたレコードを聴くのが楽しみでした。高校は電気通信科でしたので、鉱石ラジオや簡単な真空管アンプ、オープンリールのテープ・レコーダー等を自作で楽しみました。

そんなわけでレコードやオープンリールのソフトとは接していたのですが、後年自分がレコードやミュージック・テープ、その後、CD,VT,DVD等の附属品の製造に関わることになったのは不思議な因縁によるものだと思っております。

我が国には印刷業を営む企業は30,000社程だと思いますが、その内我々みたいに主に音楽に関係している企業はほんの数社を数えるに過ぎないようです。音楽業界の特性である少量且つ多品種の受注の為に大きな印刷会社が手を出さないみたいです。また、工程が分業化されている印刷・加工工程(裁、折、抜、綴じ、等)をすべて社内で一貫製造しなくては納期の確保や採算が合わないのが実情です。また少量生産故それが可能なのです。

私が主治医と仰いでいる東大の先生に職業を尋ねられた時も”ああそのようなお仕事もあるんだな”と変な感心をされました。

思うにソフトの内容に比べて縁の下の仕事、目立たない存在だと思っております。幸い、生来の音楽愛好者の一人として現在の自分に満足しております。特に我が社が製造した印刷物の中の歌手さんたちがテレビやラジオなどの放送に出た時は一人のファンとして応援したくなります。また時々訪れるレコード店で我が社の製品を見つけるとついつい手にとって見入ってしまいます。

(株)サン・ジャケットについて

今年で創業40周年を迎えることになりました。業種は主に音楽ソフトの印刷附属品の製造です。当社は役員、社員共で20人足らずの日本では典型的な小企業の一つです。

お得意先としてはキングレコード、学研、図書印刷、フリーボードレコード、ウィングジャパンレコード、アドエイ、高速録音等があります。

それらの各得意先よりCD、DVD、VT、CT等の印刷附属品の注文をいただいて今日に至っております。一応小規模ながら印刷、加工まで一貫生産をしております。現在楽曲の配信の影響で印刷附属品(ジャケット、歌詞カード等)の受注が我々の業界の生産減少を招いているのが実情ですが、我が社では例えばキングレコード様よりの受注は主に演歌、委託品、セット物、民謡、落語、浪曲等なので、今のところは配信による顕著な影響を受けておりません。しかし時代の流れには逆らえないので今後の経過を絶えず見据えながら経営を続けていく所存です。

音楽との出会い

子供の頃、蓄音機で父の集めていた SP 盤で邦楽や洋楽を聴くのが大好きでした。

高校は電気通信科だったので簡単な自作の真空管のステレオ・システムでその頃出回ってきた様々なジャンルの EP 盤や LP 盤を聴いて楽しみました。

ワシントンの日本大使館に赴任していた父から時々 LP 盤を送ってもらって、マリオ・ランザの素晴らしいテナーや、ルロイ・アンダーソンのセミ・クラシックに接し、益々音楽の素晴らしさの虜になってしまいました。

今日に至っても、相変わらずいろんなジャンルのソフトの蒐集に努力しております。統計によると熟年層のソフトの購買率は非常に低いそうですが、私の場合はそれに反してソフト漁りを行っています。

いろんなジャンルの中でもカントリー&ウェスタン音楽を特に好みます。日本では残念ながらマイナーな存在みたいですが、私はそのファンです。

C&W との出会いは、相模原で育ったのですが昔は米軍の基地があり、親友がアルバイトで退役軍人の自動車修理工場に行っていて、時々 EP 盤をもらってきて聴かせてくれたのが殆ど C&W 音楽だったのです。歌詞の意味も分からず聴いていても何か惹かれるものがありました。

高校の英語の先生が「君たちは将来英語とは無縁になるかも知れないが英語の楽しさを味あわせてあげよう」とレコードを聴かせてくれたのがその頃ヒットしていた江利チエミの「テネシー・ワルツ」でした。意味を翻訳してくれました。好い歌だと心に焼きつきました。そんなこんなで C&W の一ファンになってしまいました。

ただ C&W の CD を集めるのに国内盤はなかなか入手出来ないのが残念です。今でも TOWER RECORDS や HMV に足を運んで輸入盤を漁っております。

最近手に入れたハンク・ウィリアムス Jr. の CD で「ビールの中の涙」という曲で父親とデュエットしているのが良かったです。多分亡父の音源に自分の歌唱をダブらせているのですが亡父の音源に少しノイズがあるのが面白かったです。

数年前、もう 80 才以上の C&W の大御所レイ・プライスの日本公演を渋谷で観てからサイン入りの CD を数枚購入して彼と握手した感触は今でも忘れないです。数日後新宿のホテルで彼のサヨナラパーティーにも行き最前列の席で彼のステージを堪能できました。年期の入った素晴らしい歌の数々に聴き惚れた次第です。

これも数年前、シドニーのレコード店にオーストラリアの友人と行き、私の好きなスリム・ダスティの CD の置き場所を若い女店員に尋ねたら分からないとのこと、やむなく広い店内を捜しまわったら数種類の在庫が見つかりました。オーストラリアでも若い世代には C&W 音楽はあまり魅力が無いのかなと思いました。

ちなみにスリム・ダスティは 8 年前 76 才で死ぬまでになんと 100 以上のアルバムをリリースし、シドニー・オリンピックの閉会式でワルチング・マチルダを唄った C&W のヒーローです。

現在のカントリー・ミュージックはロック調の曲が多くなり、私の年代の者にとっては少し馴染めない面もありますが、歌は時代の風潮を反映していると思いますので、そのことを念頭に入れてこれからも一ファンとして数々の曲に接して行きたいと思っています。

マイ コレクションから ()内数字は製作年



輸入盤 ロック歌手「PRINCE」の CD パッケージ。
万引き防止用？
(1985年)



ソ連の LP ジャケット
「ミンクスのバレエ曲 ドン・キホーテ他」
ソ連から帰国した従兄の話だと LP 本体と
ジャケットは別売の場合もあるとのこと。
(1960年頃)



ソノシート「ケネディ大統領演説集」
格調高い名演説で多少勉強になりました。
(1960年)



ステレオ システム・チェック用 LP。
自分のシステムをグレード・アップしたくなりました。
(1978年)



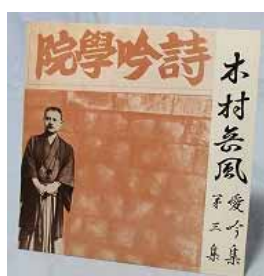
P.D.Q バッハ輸入 LP。
音楽研究社のシッケレ教授がドイツのとある町でバッハ
の未発表楽譜を見つけて LP 化したという冗談作品、
とはいえバロック調の素晴らしい曲目集。
(P.D.Q = Post Demand Quick = Instant の意)
(1979年)



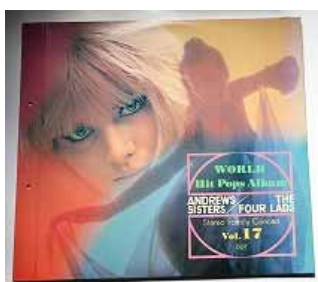
我が社で製造した本邦初の複合レーベルLP。
 "20 POWER HITS"
 高島屋系列の K-TEL Japan と東芝 EMI が企画・制作、一部地域で TV 宣伝、期間限定委託販売しました。
 (注) 当時としてのその販売方法の独自性は 教育社新書 “レコード産業界” にも記載。
 (1972 年)



上と同じく ポリドールレコードが手掛けた
 "20 DYNAMIC HITS"
 (1972 年)



懐かしい 25cmLP ジャケット。
 故あって現在も当社で詩吟界最大の「岳風会」様の CD&CT 印刷附属品を受託しています。
 (1975 年)



学研系列の研秀出版が制作・販売した "WORLD Hit Pops Album" シリーズの特異なジャケット。
 シリーズ全巻購読者にバインダーを提供し左に見える穴にビス止めするという本邦初の作品。
 (1970 年)

以下、サンジャケットの製品群の一部 話題作品も多数



平成 19 年



平成 20 年



平成 20 年



平成 22 年



平成 22 年



平成 22 年



平成 22 年



平成 22 年



平成 23 年

私の鉄道趣味

鉄道ファンにも様々な種類がありますが、私が昔からはまっているのが「運転室展望」です。文字通り運転室から前方をリアル・タイムで撮影したものです。

残念ながら一般人には運転室には入れてもらえないのですが、それ専門の業者が撮影した物が市販されていたり、また通信販売のリストにより買い求めています。以前は

ビデオ・テープを手にいれていましたが、最近では画質の劣化が少ない DVD を愛用しています。市販品が豊富に揃っている書泉グランデやじゅんく堂書店等は私にとってはメッカ的存在です。

市販品以外を求めるために松本の鉄道喫茶「みち」にまで行き、サンプルを観てから買って来たことも数回ありました。そこで同席したひとがたまたま電気機関車の運転手さんで、彼にいろいろ質問を投げかけて鉄道に関する知識を得たこともありました。

長年かけて集めたので、今では日本中の JR、私鉄、公営鉄道の殆どの路線の作品を集めることが出来ました。リアル・タイムの録画なので地方の単線区間の駅で対向列車を待ち合わせるとき対向列車が遅れた時も辛抱強く待つのですが、別にいらいらもせずに見続けています。それもファンならこそと思っています。地下鉄の場合など真っ暗闇の映像が連続するのですが、それもファンとしては面白いものです。

東京からはなかなか行きにくい地方の路線の場合などはるばる来たという旅行気分を味わえて満足しております。新幹線の場合など線路脇の電柱がめまぐるしく後方に飛んで行くように見えます。まれに列車の直前を人や車が横切ることもあり思わず手に汗が・・・他人からみたら変な、マイナーな趣味と思われるそうですがこれからも続けて新しい映像を集め続けたいと思っています。



平成 23 年



子供の頃からの夢：電車、機関車、自動車の運転手になった気分を味わえる「運転室展望 DVD」。
一般人は乗務員室に入れないのであればプロの撮影した作品を血眼になり買い求めた結果、全国のJR、私鉄、公営鉄道の殆どが揃いました。他人からは変な趣味と思われるようです。
(DVDが普及する以前のビデオ・カセットも数百本所蔵しています)

余話

以前オーストラリアの友人夫妻とキャンベラのホテルに泊まった朝テークフリーの冷蔵庫の中に茶色いペーストを見つけチョコレートだと思いパンに塗って食べたら苦くて酸っぱくて、友人に腐ったチョコレートスプレッドかと尋ねたら、オーストラリア特産の VEGEMITE というものだと言われました。他の食品とは全く違った独特の風味で VEGEMITE の味とクリケットの面白さを知ることがオーストラリアを理解することだと言われました。

後年友人とクリケットの国際試合を丸一日観戦しましたが、そのルール複雑さはせつかな我々日本人には到底理解しがたく、クリケットがアメリカに渡って、より簡単なルールとスピーディにプレイ出来る野球に転化したことが理解出来ました。

日本ではクリケットの試合を観ることはできませんが、VEGEMITE は近年東京でも手に入られるので私も常用しています。余談ですが銀座のクラブで働いているオーストラリアの女の子から聞いたのですが幼年期に風邪を引いたり腹具合の悪い時に母親から VEGEMITE をお湯に溶かして飲まされたそうです。

筆者プロフィール

鈴木 秀夫 (すずき ひでお)

昭和9年生まれ、東京都中野区出身。

県立神奈川工業高校電気通信科、中央大学法学部、成蹊大学政治経済学部で学んだ後、西濃運輸勤務、その後キングレコードのレコード・レーベルを製造していた第十五興生社に転職、その後(株)サン・ジャケットの創立に参加し今日に至る。

現在(株)サン・ジャケット 代表取締役社長。

今年 30 周年を迎えたドイツのハイエンド・ショー



ドイツ、ミュンヘン High End 2011 レポート

未だ、真空管アンプやアナログレコードが現役で活躍
ここはまさにオーディオ界のガラパゴスだ！

森 芳久

本誌でも毎年取り上げてきた、オーディオ・ファイルの夢の祭典、ドイツのハイエンド・ショーが今年も5月19日から22日まで、ミュンヘンの博覧会場MOC (Munich Order Center) で開催された。早いものでこのハイエンド・ショーも今年30周年と記念すべき年を迎えた。それだけに、ハイエンド協会はもちろん、参加各社の熱の入れ方も例年に増して強いものが感じられ、会場も例年より広くなり、出展社も337社と昨年の258社を大きく超え大盛況な催しとなった。

今や、このハイエンドは高級オーディオに関するショーとして、名実共に世界最大のものとなっている。同じハイエンド関連のショーとして大きな催しは、毎年1月初旬に開催されるラスベガスのCESである。このCESは電気製品の全てが集まる世界最大の電気関連ショーであり、この中に高級オーディオ専門メーカー各社がメイン会場とは別の会場(近年はベネチアン・ホテルの専用フロアを貸し切って行われている)で開催している。しかしながら、CESは本来電気業界関係者のみの集まりであり、直接ユーザーと関係者が一同に会する最大のショーは、このドイツのハイエンド・ショーということになる。

世界的にオーディオ・マーケットが減少するという厳しい情勢の中、このハイエンド・ショーだけは毎年出展社数が増えている。これはハイエンド協会の地道な啓蒙活動と会員会社との密接な関係保持を努めていることの現れであろう。またハイエンド協会では、観光局や旅行会社などショーに関係する各団体との連携を深め、ミュンヘン市の協力も取り付けている。そのため、ハイエンド・ショーのPRは徹底しており、街のそこそこでポスターを見ることができる。しかも、このポスターや宣伝物などが、毎年同じイメージを踏襲しており、まさにその潜在的な反復宣伝効果が機能しているように思える。この点は日本オーディオ協会もおおいに学ぶべきと考える。

このショーには参加者を楽しませる多くの工夫がされている。そのひとつは、会場ではいろいろな場所で生演奏が披露され、来場者を和ませると同時に生演奏の魅力と最上のオーディオをイメージさせる演出だ。今年もすっかりお馴染みとなったサキソフォン・シスターズが会場のあちこちで人気を博していた。次に、貴重なアナログ・ディスクやCDソフト即売コーナーなどが用意され、多くのソフトが販売されていることだ。オーディオファイルの人気のある場所として、普段入手困難なレアなLPレコード、オーディオ・レーベルの高音質CD、またSA-CDソフトなどが買求められていた。

そして、カフェテリア、レストラン、屋外ビアホール、休憩場所などが完備され、仲間との語

らいや商談などができるスペースが十分に用意されていることである。出展社によっては、隣室に商談場所や簡単な飲食サービスの場所を用意しているところもあり、世界からの客人をもてなしてくれる。また業界やプレス関係者向けには初日にプレス・カンファレンスも催され、このショーの大きな方向性や最新の動向などが解説された。特に今回は 30 周年記念として、過去の歴史なども披露された。

今年の大きな特徴は、コンピュータ、またブロードバンド配信による高音質オーディオの行く末を占ういろいろな思索が発表されたこと。さらにデジタルアンプと新しいスピーカーの誕生などである。新しいスピーカーが多く誕生するとオーディオ界に活気が溢れると言われているが、是非このジンクスを期待したい。

一方、今年も真空管アンプまたアナログプレーヤーなどが健闘しており、さらにそれらの新製品なども続々と登場していた。最先端技術を導入した製品も誕生する中、こうして未だ真空管、アナログプレーヤーが堂々と主役として生き続けているのもハイエンドの世界ならではだ。そう、まさにこのハイエンド・ショーはオーディオ界のガラパゴスなのだ。ガラパゴスだからこそ、オーディオの進化の歴史、そしてそこに住む喜びを満喫できるのかもしれない。

それでは、今回の会場の様子を写真で追ってみよう。

今年の会場は何とんでも 30 周年ということで、特別ロゴを配した垂れ幕やポスターがひと際目に付いた。例年になく華やいだ感じがあちこちで見受けられた(写真 1)。



(写真 1) 会場のあちこちに誇らしく輝く 30 周年記念ロゴ

今年、最も注目を集めたスピーカーは KEF の Blade(写真 2A)だ。Blade という名が示すように、刃のような特徴ある形状と水平対抗型のウーハーユニット(写真 2B)がその音の秘密だ。KEFらしい繊細な音に加え、フォログラフィックな音像が印象的であった。



(写真 2A) KEF の新製品スピーカー Blade



(写真 2B) KEF の Blade の心臓部スピーカーユニット

アンプと SA-CD プレーヤーで、既に日本でも人気のある LINDEMANN は小型のスピーカー Birdland BL-10 (写真 3) を発表。小型ながらしっかりした音で低域の迫力も満点。音とデザインを両立させたスタンド付きで€7,000 / ペア。



(写真 3)
リンデマンの
新製品、
小型スピーカー
Birdland BL-10

ABSOLUE CREATIONS から珍しいリッフェル型スピーカーが登場(写真 4)。このような製品に接することができるのもハイエンド・ショーの魅力である。



(写真 4)
ABSOLUE
CREATIONS
の珍しい
リッフェルスピーカー

EBTB (Everything But The Box) 「箱 (スピーカーボックス) 以外の全て」を標榜するブルガリアの美しいスピーカー。今年もこの独特のフォルムを持つ Pluto (写真 5) が注目を集めていた。



(写真 5)
EBTB の
スピーカー
Pluto

ドイツの AXISS ブースでは USB パワースピーカー、Olasonic TW-S7 が。人気を集めていた。

これはハイエンドとはいえないものだが、PC や Mac などの USB 端子からの電源供給で最大出力 10W-10W を誇る堂々たる迫力の音を再現する。

日本の東和電子で開発され、既に国内の通販などでベストセラーとなっているものだ。



(写真 6)
AXISS のマンザ
ノさんと Olasonic
TW-S7

毎年、人気のブースがオールホーンの avantgarde (写真7)だ。今や、スピーカーのみならずアンプにまで進出、オールホーンならではの魔力に磨きがかかり、聴衆はしばしこの音に誘惑される。



(写真7) avantgarde の魅惑の音

avantgarde と対照的な音作りが同じドイツメーカー、mblだ。既にこのブースでは恒例となった、生演奏との比較試聴のデモ。(写真8)

装置はフラッグシップモデルの Reference シリーズにスピーカーは超弩級 101 X-treme。

演奏者自らが生楽器に近いその音の特徴を解説していた。



(写真8) 毎年恒例となった mbl ブースでの生演奏

今年のデジタルアンプの中で、最も話題を呼んだのがフランスの DEVIALET のアンプだ。超薄型で鏡面仕上げの特徴あるデザインもまた注目を浴びていた。(写真9)



(写真9) 鏡のような鏡面仕上げの DEVIALET のデジタルアンプ

ハイエンドの世界では接続ワイヤーも重要なコンポーネントだ。

今年も多くのワイヤーメーカーがその技術と音を競っていた。

中でも高音質ワイヤーの草分けともいえるオランダのファン・デン・フル氏が新製品 3T シリーズをデモ(写真10)。

3T とは True Transmission Technology を意味し、彼の今までの研究成果を全て投入して完成したという。

彼の真剣な眼差しがそれを物語る。



(写真10) ファン・デン・フル氏と新製品 3T コード

ハイエンドの世界にも高品位のダウンロード・ソースが多く販売され、また CD や SA-CD プレーヤーに代わり、コンピュータもまたハイエンドのコンポーネントとなってきた。それに呼応して高品位 USB ケーブルなるものも昨年より登場し始めている。今回もこの高品位 USB ケーブルは話題を呼んでいた(写真 11)。



(写真 11)
ハイレゾ USB
ケーブルに人気

Clockwork Audio の電源ケーブルや接続ケーブルもまた面白そうである。

ハイエンド機器の音質チューナーとしてこの世界では“知る人ぞ知る”鬼オフォルカー・バヨラー氏(写真 12)の手になる製品で、彼の魔法のチューニングを試してみたかったが、今回は残念ながら試聴する機会がなかった。



(写真 12)
超人的音質チューナー、
フォルカー・バヨラー氏

ガラパゴスに生き残る真空管のアンプたち。トランジスタ誕生から既に 60 年を経た今日もその光は薄れていない。これは豊富なラインナップを持つ Ayon のブース(写真 13)。



(写真 13)
Ayon
真空管アンプ

今や真空管アンプの大御所となったチェコの KR。

看板モデルの超大型真空管アンプに加え、真空管と半導体のハイブリッドアンプも開発。亡くなったご主人の後を引き継ぎ社長として采配を振るうユニース・クロンさん(写真 14)。獣医の資格を持つドクターだ。

以前は日本でも販売されていたが、現在代理店を模索中。



(写真 14)
チェコの KR の
オーナー、
ユディースさん

30周年記念の開催に沸く今回のショー。華やかなムードに演出され例年よりも会場面積も増え、ハイエンド・オーディオ健全なりの印象を受けた(写真15)。



(写真15)
メイン会場の
広場、30周年の
マークが誇らし
く輝く

オープンプースが並ぶアトリウム会場の雰囲気(写真16)。

ここを巡れば親しい顔に出会うはずだ。



(写真16)
アトリウム会場
の雰囲気

今年も人気のソフト販売コーナー(写真17)。
例年よりも出展社が増え賑わいをみせていた。



(写真17)
今年も人気の
ソフト即売
ブース

会場のあちこちで生演奏が楽しめるのも、このショーの大きな特徴でありまた来場者を喜ばせる呼び物でもある(写真18A)。



(写真18A)
ブースでは生演奏
もある

ここ数年レギュラーで努め、すっかりお馴染みとなったサキソフォン・シスターズが今年も屋内外で雰囲気を盛り上げていた(写真18B)。



(写真18B)
お馴染み
サキソフォン・
シスターズ

最新の技術動向や新製品についての解説や紹介が行われる技術講演会場（写真19）。



(写真19)
技術講演会

イタリアのオーディオレーベル fone を主宰する、ジュリオ・チェーザレ・リッチ氏(写真20)。

彼はこのハイエンドの多くのブースで自ら録音したCD、SA-CD、アナログレコードなどをデモした解説をする。

往年の名歌手パバロッチェに似た風貌が説得力を増す。



(写真20)
毎回各ブースで自身のディスクやSA-CDをデモするシニョーレ、リッチ

21 毎年発行される貴重な資料、ハイエンドのカタログ(写真21)。400ページを超える豪華なカタログが10€(約1,150円)とは安いのではないだろうか。



(写真21)
実用的かつコレクションとしても貴重な豪華カタログ

22 シャトルバスで指定のホテル数箇所と会場を結ぶ無料シャトルバスに加え、今年は地方や海外から飛行機で来場する客に飛行場と会場の往復バス(初日と2日目のみ)のサービスも加わった(写真22)。こんなところにも、ハイエンド協会の力の入れ方がわかる。



(写真22)
シャトルバスも用意(ホテル、飛行場など)

23 ミュンヘンM.O.C会場の外観
(写真 23)。シャトルバス以外に、
Uバーン(地下鉄)でのアクセスも便利。



(写真 23)
会場の建物外観

24 街のあちこちで見かけるハイ
エンドのポスター(写真 24)。

毎年同じイメージを踏襲し継続効果を
期待している。日本オーディオ協会でも
見習うべきではないだろうか。



(写真 24)
街中に見られる
ハイエンドの
ポスター

25 初日夜に開催された 30 周年記念
パーティー(写真 25)。

約 1000 人の業界関係者が一同に集い
その歴史を祝った。



(写真 25)
記念パーティー
会場は 1000 人
ものオーディオ
ファンが詰め掛
けた

26 挨拶に立った、ハイエンド協会
会長のクルト・ヘッケル氏(左)と
副会長のアレックス・マニング氏(右)。
(写真 26)



(写真 26)
会長と副会長
の挨拶

27 料理はもちろん、ソーセージ
や豚肉そしてポテトがふんだんな
ババリア料理(写真 27)。



(写真 27)
味も量も満点、
ババリア料理

28 飲み物も当然ミュンヘンの地ビール(写真28)。ビールよりウエイトレスに目が行く。



(写真28) 飲み物は当然ミュンヘンの地ビール

29 そしてパーティーのメイン・エンターテインメントはロックのライブだ(写真29)。

7時にオープンしたパーティーは深夜の2時まで続いた。



(写真29) 記念パーティーのイベント

最後に、今回の出展社数、来場者数などのファクト・データーを示した(図1)。これらの数字は第三者機関による厳正な数字で、来場者数の中には出展社関連の人数はカウントされていない。

来場者数こそ昨年より減少したが、出展社は大幅に増え、その分感覚的には例年より盛況であった印象を受けた。ミュンヘンでのオーディオの熱い風がこの秋の日本のオーディオ界を熱く刺激してくれることを切に望む次第である。

年度	2009年	2010年	2011年	前年比
スペース	18373m ²	←	20000m ²	+8.9%
出展社	248社	258社	337社	+30.6%
報道関係	438人	446人	437人	-2.0%
来場者 (業界人)	13677人	14869人 (3894)	14079人 (4398)	-5.3% (+14.3)

(図1) ハイエンドのスペース、出展社、来場者など、近年の推移

連載 第6回 『試聴室探訪記』

～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

パイオニア プラザ銀座

フォトグラファー 谷口 とものり

編集委員 森 芳久



今回は、今年2月にオープンした「パイオニア プラザ銀座」の視聴室を訪問いたしました。

「パイオニア プラザ銀座」はその名が示すように、銀座中央通りから、マロニエ通りを有楽町駅に1ブロック入ったデビアス銀座ビル内に設けられ、1階、2階がパイオニアの新しい技術や最新の商品などの体感・体験、そして地下1階が同社の誇るハイエンドオーディオ TAD の最高級の音、大スクリーンによるホームシアターなどが体験できる視聴室となっています。

TADとは Technical Audio Devices の頭文字から命名され、1975年にパイオニアが最高級スピーカーを開発するときに、その技術顧問として参画した米国のプロオーディオの第一人者だった故バート・ロカンシーの「基本に忠実な技術こそ本物の技術であり、技術志向に傾くことなく、常に音質を最重視する技術こそ本物の技術である」という理念に基づく、“綿密な理論検討と正確な実験に裏付けられた工学的アプローチの手法”を表現したものです。TADスピーカーは米国のプロ業界で成功し、その後日本を含む世界の多くのスタジオで評価されました。

2007年、TAD Reference One スピーカーをコンシューマ用としても発売、パイオニアのフラッグシップ・スピーカーとなりました。その後 TAD Compact Reference CR1、モノラルパワーアンプ M600、ディスクプレーヤーのフラッグシップモデル D600、プリアンプ C2000 などが加わり、フラッグシップのフルラインナップが完成しました。

この最高級の音を体感できるのがここ「パイオニア プラザ銀座」地下1階の視聴室です。但し、この視聴室はホームシアター(12:00～14:00)、DJ 機器(16:00～18:00)などの視聴体験も行わ

れていますので、TAD の視聴時間帯は 14:00 ~ 16:00 となっています (但し、イベントなどにより時間帯が変更になる場合があります)。

さすが TAD の最高級品によるサウンド、その端整で格調のある音は故口カンシーの面影を残しています。銀座の雑踏に疲れたら、ここで TAD による最高の音を楽しみ、しばしミュージックの世界に身を委ねてみてはいかがでしょうか。

(編集委員 森 芳久)

「パイオニア プラザ銀座」



住所 : 中央区銀座 2 - 5 - 11
デビアス銀座ビル 1F・2F・B1F
開館時間 : 11:00 ~ 19:00 (火 ~ 日曜)
休館 : 月曜 (月曜が祝日の場合は翌日)
交通 : JR 線有楽町駅より徒歩 5 分、
東京メトロ銀座線・丸の内線・日比谷線
の銀座駅より徒歩 4 分
同有楽町線銀座一丁目駅より徒歩 2 分

フロア案内 : 2F 有機 EL 大型ディスプレイ、ヘッドフォン、ホームオーディオ・iPod 用
スピーカー・単品コンポ、ホームシアター、カーナビゲーション・カーAV
1F ハイライトエリア、サウンドクーン、ニューテクノロジー、
ニューカーライフコンセプト、サイクルコンピューター
B1F 視聴室... TAD、ホームシアター、DJ 機器

「パイオニア プラザ銀座」のホームページは : <http://pioneer-ginza.jp/> です。

パノラマ画面の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、前ページの[視聴室画像](#)をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- スピーカー等、マウスを当てて、クリックすると機器名が表示されます。
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
 - + 画面のズームイン
 - 画面のズームアウト
 - ← 画面の左移動
 - 画面の右移動
 - ↑ 画面の上方向への移動
 - ↓ 画面の下方向への移動



「テープ録音機物語」

その56 ステレオ・テープデッキ (4)

国内のメカだけのデッキ

あべ よしはる
阿部 美春1 まえがき ⁽¹⁾

日本では1955年(昭和30年)12月にソニーから発売されたTC-551型(¥135,000)が普及型のステレオ・テープレコーダーとしては最初のものである(「その41」, 写真41-6参照)。

その後は、ソニー、アカイ、ティアックなど数社が1957年頃から主にアメリカ向けに、ソニーを除いてはOEMブランドで輸出し、また国内でも販売(国内では自社ブランド)していた。

また、国内でも早くからステレオ・テープが輸入され、製作もされていたが、45/45ステレオ・ディスクの登場で、ごく一部のマニアを除いてはテープによるステレオはアメリカほどの活気をみせなかった。当時、日本国内ではステレオ・テープデッキ*1の種類も少なく、価格も安くはなかった。

注*1 本物語「その54」, 7項に用語、テープデッキについて解説している。

2. メカだけのテープデッキ ⁽¹⁾ (422)~(433)

この頃(1957年)、創立間もない東京電気音響(株)(TEAC)からステレオのテープ・トランスポート・メカニズムが発売された(写真56-1)。また、会員向けにメカのキットを開発していたテープレコーダー研究会(代表者:三文字 誠)が1958年に331型(写真56-2)の頒布を始めた。さらに早くからメカ・キットを発売していた増尾電機(株)(Homeブランド)も1960年には、ステレオ・メカを(写真56-3)そして、ソニーと並んで放送用テープレコーダーで知られている電音(DENON)がHiFi用ステレオ・メカを発売するに及んで(1961年、写真56-4)テ

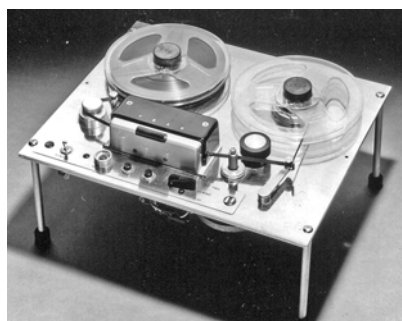


写真56-1 TEAC TD-102型テープデッキ



写真56-2 TRK 331型テープデッキ



写真56-3 Home 3000型テープデッキ



写真56-4 DENON 700型テープデッキ

テープデッキの自作マニアが活気ついてきた。すでにステレオ・テープレコーダーを国内で販売を始めていたソニーも 1964 年になって遅ればせながらメカだけの再生専用機、そして自作マニアのために録音・再生アンプなしのテープデッキ TC-263D 型 (22,800 円、写真 56-5) を発売した。表 56-1 にこの頃販売されていたステレオ・メカ (テープ・トランスポート・メカニズム) を表にまとめてみた。以下、各社ステレオ・テープデッキデッキの概要を簡単に紹介する。



写真 56-5 SONY 263D 型テープデッキ

ブランド	型名	発売年	価格 (¥)	テープ速さ (cm/s)	リール (号)	ヘッド数	ヘッド構成	再生トラック	録音チャンネル	モーター数	ドライブモーター	リールモーター	キャプスタン	写真
DENON	700	1960	44,000	19, 9.5	7	3	E,R,P	2	2	3	HS,4p/8p	Ind	ベルト	56-4
HOME	2000	1960	?	19, 9.5	7	2	E, R/P	2	2	1	HS, 2p/4p	- -	ベルト	56-3
	3000	1961	49,000	19, 9.5	7	3	E,R,P	2	2	3	HS, 2p/4p	Ind		56-8(a)
	5000	1965	57,000	19, 9.5	7	3	E,R,P	4	2	3	HS,4p/8p	Ind		56-8(b)
SONY	TC-263D	1964	22,800	19, 9.5	7	3	E,R,P	4	2	1	Ind, 4p	- -	アイドラー	56-5
TEAC	TD-102	1957	59,000	19, 9.5	7	3	E,R,P	2	2	3	Ind, 4p	Ind	ベルト	56-1
TRK	331	1958	30,000*	19, 9.5	7	3	E,R,P	2	2	3	Ind,4p	Ind	アイドラー	56-2
			18,000**	*ヘッドなし、**ステレオ・ヘッド アセンブリー										
	33BX	1965	47,000*	19, 9.5	7	3	E,R,P	2	2	3	HIS,4p	Ind	アイドラー	56-7a
			7,000***	***ヘッド1式(シールドケースはデッキ付属)										
VIKING	FF75SR	1957	US\$113.00	19, 9.5	7	3	E, R/P	2	2	1	Ind	- -	ベルト	53-4
	85ESQ	1960	US\$179.50	19, 9.5	7	3	E, R/P	4	2	1	Ind	- -	ベルト	"

表 56-1 国内のステレオ用テープ・トランスポート (アンプなし)

TEAC TD-102 型:

アンペックス 300 型メカのジュニア版といった雰囲気がある。3 モーター・3 ヘッド式であるが、最大リールは 7 号、化粧パネルはアンペックス同様、ステンレス板を使って HiFi 用に小型化しているところがにくい。

キャプスタン・ドライブは絹ベルトで、モータースプリングで引いてベルトにテンションを与えている。キャプスタン・モーターは 4 極インダクション形でキャプスタンの頭を交換して 19 と 9.5cm/s の 2 スピードとしている。

最大使用リールは 7 号、ブレーキ・プランジャーに接点を付けてリレーを省略、プレイ、早送り、巻戻しの切換えはロータリースイッチである。

テープ・シフターはヘッド・ハウジングの前蓋開閉によって動作する。

ヘッド構成はフル・トラック消去、2 トラック・ステレオの録音と再生の 3 ヘッド構成である。重量 12kg、外形寸法 400x330x155mm、価格は 59,000 円とプロ級に比べて破格の値段であるが、当時、大卒初任給 12,000 円ではアマチュアが手の届く範囲ではなかった。(本物語「その 54」の余話 54-1 参照)

TRK (テープレコーダー研究会) (276) (422)~(428) :

アマチュアにとって米国のアンペックス級(300型)テープレコーダーは垂涎的であった。そこで機構部品を含め、自作しようと研究会が1952年頃、神田小川町のエコー商会の三文字 誠氏が中心となって発足した。技術的なサポートは日大・機械工学部出身の高橋 功氏で当時、テープ・プリントを本業にしていた。三文字氏は戦前、満州の放送局の技師であったと伺ったことがある。

筆者は1960年頃、「4トラック・ステレオテープの問題点」と題して研究会で講義したことがあり、また、三文字氏とは1965~71年頃、JISテープレコーダーの審議会やオーディオ雑誌の座談会で一緒にした関係もあって長いお付き合いをさせていただいた。お二人ともテープレコーダーの製造に関してはアマチュアであり、同好の志は最盛期には1000名に達していたようである。

1957年秋の全日本オーディオフェアには試作品を発表するまでになった。そして翌58年のフェアには331型(写真56-2及び56-6 a)を展示するようになった*2。331型はアマチュアの作とは思えない出来栄で、多くの自作マニアには大きな魅力となった。

1957年(昭和32年)は、12月24日にNHKのFM放送東京実験局、翌年2月に大阪実験局と続いて開局し。1960年(昭和35年)にはFM東海が実験放送を開始した(276)。そして、専用のチューナーがいち早くトリオ、山水、ナショナルから発売され、翌1958年に入ると各社から一斉に発売された(425)。なかでも日本で最初に市販したトリオ(FM-100型)から引続き発売された、約6千円の廉価版チューナー・キットFM-110C型(426)はアマチュアのエアチェックに拍車をかけ、TRKのメカ・キットの頒布は絶好のタイミングとなった。

TRK 331型は3モーター方式で、キャプスタン・ドライブは4極インダクション・モーターをアイドラーで減速し、19と9.5cm/sの2スピード、リール軸のブレーキはアンペックス形のバンドブレーキに

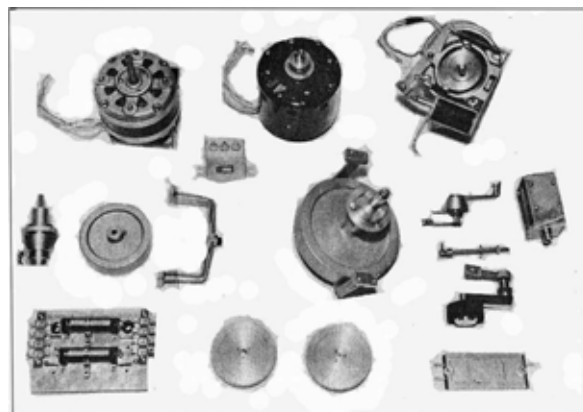


写真 56-6 (a) TRK 331 型パーツキット

板バネ接点をつけてリレーを省略している。したがって、押ボタンはスタートとストップだけであり、再生・早送り・巻戻しの切換えはロータリースイッチである。価格は¥30,000(ヘッドは別売り、ステレオ・ヘッドは1組¥13,000)。

頒布が開始されてすぐ、1958年10月にはアマチュア会員の鈴木 重行氏が、この331型を、録音を含めた5押ボタン式に改造している。写真56-6b*3は自作アンプと一緒に木製ケースに収めた、その改造品であるが、その後、何回か手が加えられている。

TRKでの全押ボタン式メカ(33BX型)の頒布は1965年になってからで(写真56-7a)、リレー回路と機構部の改良に時間を費やしたようである。



写真 56-6 (b) 鈴木氏の改造試作デッキ



写真 56-7 (a) TRK 33BX 型テープデッキ

33BX は、キャプスタン・モーターに 4 極ヒステリシス・シンクロナス形を使用し、テープ速さ (19cm/s、9.5cm/s) の切換はアイドラー式、キャプスタン駆動は中間アイドラー式である。

価格はデッキのみで ¥47,000 (ヘッドは別売、ステレオ 1 組 ¥7,500、シールド・ケースはデッキ付属) アンプの部品キットは 1 チャンネル 1 式で ¥18,500、配線調整済みは ¥21,000 である。

また、同じ頃、アンプのプリント基板や 10 インチ・リールメカ・キット 339 型を作り、339 型は会員に ¥72,500 (ヘッドは別売り: ¥7,500) で頒布している⁽⁴²⁸⁾。このモデルはたいへん好評であった (写真 56-7b)。



写真 56-7 (b) TRK 339 型テープデッキ

メカの操作部は左から電源スイッチ、ネオン・パイロット、押ボタン (4 個) は PLAY, STOP, REWIND, FAST FORWARD の順、そしてバックテンション切換とテープ速さ切換 (19cm/s、9.5cm/s) である。キャプスタン・モーターは 2 極・4 極のヒステリシス、シンクロナス形、キャプスタン駆動はフライ・ホイールの外側にモーターを圧着させている。アンプ部はプリント基板、録音再生各 2 枚組込みでステレオになっている。価格は部品 1 式で ¥60,000、配線調整済で ¥70,000 である。

研究会の事務所はその後、神田・小川町から新宿区愛住町に移り、さらに 1970 年頃、テープ・プリント業務と一緒に新宿区笹塚町に移っている。1980 年代に入って三文字氏が亡くなったため、研究会も自然消滅した。高橋 功氏も 2000 年初頭に若くして逝去されたと聞く。

会員には、その後、放送局やテープレコーダーメーカー関係の会社に就職している人も多く、業界にとっても同研究会存在の意義は大きかったといっても過言ではない。

注*2 三文字 誠「テープレコーダー研究会」
JAS オーディオ資料 1958 年版(1958.09)

注*3 試作機は長年、鈴木 重行氏の母校・都立日比谷高校の放送部で使われ、現在は同校の 100 周年記念 (1978 年)・資料館に保管・展示されている。

Home ブランド^{(429)~(431)} :

神田小川町に店がある(株)電気堂の製造部門が(株)増尾電機製作所で、アカイについて早くからテープレコーダーの組立キットを手掛けていた。

1954 年の「ラジオと音響」誌に TP-3 型キットの回路図が紹介されている。その後、同誌 1958 年 9 月号には TP-518 型のテープレコーダーの製作記事が吉田 邦雄氏(同社の技術担当)によって紹介されている。この頃、専務の増尾氏と技術の吉田氏にお

会いする機会があったが、キットに対する情熱は相当なものであった。

1960年、セミプロ級をねらった3モーター・3ヘッドのステレオ・テープデッキ TP-3000型が発売された(¥49,000、写真 56-3)。最大リールは7号、テープ速度はキャプスタン・モーターの極数を切り替えて9.5cm/sと19cm/s、キャプスタン・スリーブの交換で38cm/sも可能、操作はオール・プッシュボタン、モーターはリール用が6極のインダクション、キャプスタン用が2極4極のヒステリシス・シンクロナスを使っている。

翌61年ラジオ技術誌1月号にTP-2000型ステレオ・キットの解剖記事を吉田氏が書いている。

ワン・モーター・メカであるが、2極4極ヒステリシス・シンクロナス・モーターを使い、モーターの極数を電氣的に切換えて9.5cm/sと19cm/sの2スピード、キャプスタンはほとんど伸縮のないテトロン・ベルトを使用、早送り、巻戻しは、ボタンとカム操作で行われ、早巻時間は2分半である。ヘッドは2トラック・ステレオ録音再生兼用ヘッドと消去ヘッドの2ヘッド方式である(価格不詳、写真 56-8a)

1965年には本格的な3モーター式4トラック・ステレオ・デッキ(メカのみ)TP-5000型 ¥57,000、同写真b)が発売されている(427)。

DENON 700 (432~434) :

放送専用にこだわっていた電音が TEAC の TD-102 型に刺激されたのか、1961年になってようやく Hi-Fi 用テープデッキを発売した。

ウルサ形アマチュアを対象に設計したといわれるセミプロ級3モーター・デッキである。

外形寸法は380x310x10mm、重量約10kg、テープ速度は9.5cm/sと19cm/sをキャプスタン・スリーブ交換により切替える。2トラック・ステレオ・3ヘッド、ワウ・フラッターは0.2%以下、速度偏差±0.2%以内となっている。

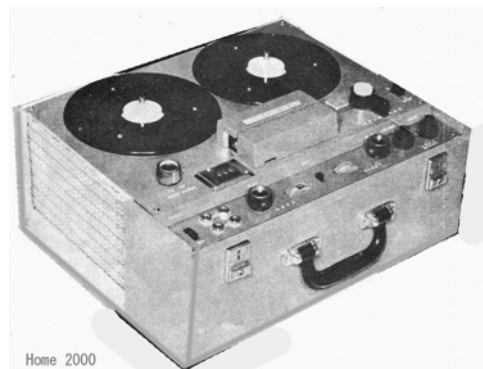


写真 56-8 (a) Home 2000 型テープデッキ

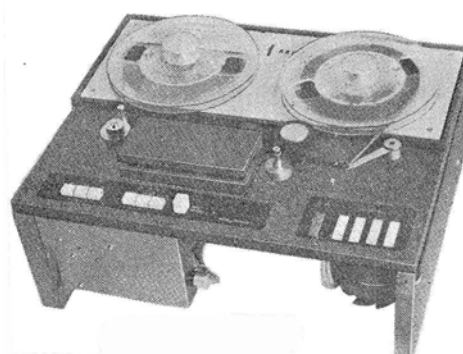


写真 56-8 (b) Home 5000 型テープデッキ

早送り、巻戻しは7号リールで約50秒、最大使用リールは7号。操作は、オール電氣的プッシュボタン式である。したがって、リモート・コントロール可能。キャプスタン・モーターはヒステリシス・シンクロナス形、左右2個のリール・モーターはコンデンサー起動インダクション形、価格は44,000円である。

SONY 263D (435-440) :

ワン・モーター・3ヘッド、4トラック・ステレオのメカだけのテープデッキである。

テープ速度は19cm/sと9.5cm/s、最大リールは7号、ワウ・フラッターは19cm/sで0.75%rms以下、9.5cm/sで0.25%以下、外形寸法は356(幅)×172(高さ)×279mm(奥行)、重量は約6.5kg(本体のみ)である。

機構部は上位機種 TC-500、TC-600 と同じもので、ソニー自慢のオール・アイドラー方式である。垂直

使用でも使える機能の他、数多くの特長をもっている。

263D のカタログに特長が次のように書かれている。

ステレオ・テープを聴くもっとも手軽でエコノミカルな手段として開発されたテープデッキ。手持ちのアンプのテープ・ヘッド端子に接続するだけで楽しめる

消去・録音・再生にそれぞれ専用ヘッドを用いた3ヘッド構成となっており、録音時の再生モニターが可能。再生ヘッドにはソニー2ミクロン・ヘッドを採用。

仕様スペースや操作法により、垂直位置、水平位置いずれも動作することが可能。

また、月売り専用マウントアクセサリがある。

マイクロスイッチによる自動停止装置を内蔵しており、テープが終わった時、自動的に電源が切れる。

テープ・カウンターを搭載している。

録音中・再生中に急停止できる急停止レバーを搭載している。

垂直使用時にテープを抑える専用リール・キャップが付属している。

テープレコーダーの場合、高質な録音が簡単にできるところにメリットがあるので、テープ・トランスポートを購入しても、レコード・プレーヤーのような再生だけの利用では宝の持ち腐れになってしまう。「その54」で述べた米軍の例で軍属の技術者が録音アンプを自作できる場合だけをよとしたのでは、顧客は自作マニアに限定され、数量が限定されてしまう。結局はアンプ付きのテープレコーダーを安く提供することがメーカーの目標でなければならない。ビジネスとしてのメカだけの販売は当然暫定的なものとなるのは当然の成り行きである。

謝辞

今回、TRK に関して、元 TRK 会員・鈴木 重行氏（現日本フィル録音担当ボランティア）からたくさん資料を提供いただきました。ここに厚く謝意を表します。

【参考文献】

- (1) 日本オーディオ協会編「オーディオ50年史」VIII 磁気録音(1986.12)
- (276) 日本オーディオ協会編「オーディオ50年史」XV 放送(1986.12)
- (422) 座談会・テレコ研究会「第3章セミプロ用は3モーター」ラジオ技術(1956-11)
- (423) 国産テレコ豆宝典「ステレオ・デッキ TRK 311」ラジオと音響(1958.9)
- (424) 三文字 誠「テープレコーダー研究会」日本オーディオ協会編、1958年版オーディオ資料(1958.09)
- (425) 日本オーディオ協会編「オーディオ50年史」V チューナー(1986.12)
- (426) 「TRIO FM-110C データシート」春日無線工業(株) (1958.03)
- (427) TRK ニュース「TRK 33BX 標準タイプ」テープレコーダー研究会(1966.06 改訂)
- (428) TRK ニュース「TRK 339 標準タイプ」テープレコーダー研究会(1966.06 改訂)
- (429) 吉田 邦雄「新形ステレオ・テープデッキ TP-3000 の解剖」ラジオ技術(60-5)
- (430) 吉田 邦雄「市販された簡易形 TP-2000 ステレオ・テレコ・キットの解剖」ラジオ技術(61-1)
- (431) 浅野 勇「セミプロ級 4 トラ・テレコ.(HOME 5000)の製作」ラジオ技術(1965.12)
- (432) 長岡 和男「デンオン 700 型テープ・メカの解剖」ラジオ技術(1959.10)
- (433) 今沢 鉄夫「デンオン 700 型テープ・メカの最適ステレオ・アンプの設計と調整」ラジオ技術(1960.05)

- (434) 「デンオン 700」ラジオ技術誌グラビア(1961-01)
- (435) SONY TC-263D カタログ
<http://audio-heritage.jp/SONY-ESPRIT/player/tc263d.html>
- (436) 福田 宗基(435) (436) 「TC-263D+TR プリステレオ・テープ・プレーア」ラジオ技術(1965.12)
- (437) 渡辺 清光「ソニーTC-263D デッキを使った4トラ・テレコ的设计・製作・調整のすべて」ラジオ技術(1965.12)
- (438) 島田 公明「ソニーTC-263D デッキを使った4トラ・ステレオ・テレコ的设计製作」ラジオ技術(66.7)
- (439) 渡辺 清光「ソニーTC-263D メカプラス 2chメイン付全TRステレオ録再アンプ的设计・製作」ラジオ技術(1966.12)
- (440) 五島 勝「ソニーTC-263D 形4トラック・ステレオ・テープデッキ活用法」ラジオ技術(1967.7)
- (441) 高城 重躬著「音の遍歴」共同通信社(1974.09)

余話

56-1 TEAC の誕生

TEAC (東京電気音響(株))の設立は1956年12月である(資本金 150 万円)。会社設立のきっかけは当時、フリーになっていた谷 鞆馬氏(谷 勝馬社長の弟)宅の作業部屋(三鷹市)で始まっている。

鞆馬氏は東京テレビ音響(株)(TTO)の設立の際(後述・次回余話)、国税局を辞めて主に経理担当の専務として参加したが、その後TTOがヤマハの傘下になるときに退職している。

フリーの鞆馬氏は3モーター・3ヘッドのステレオ・テープデッキの製作にかかっていた。自ら部品を買い集め、自らパネルに穴をあけ、ヤスリをかけて組立てていた。ステンレスパネルのそのデッキは後にTD-101と名付けられた、第1号機の完成と共にその機械は兄勝馬氏宅に持ち込まれた。放送局用録音機で名をなしていた日本電気音響(株)(DENON)の研究・試作課長を経て、日本楽器製造(株)(YAMAHA)の東京研究所長の職にあった谷 勝馬氏の審査を受けたわけである。見事合格である。部分的には修正の必要があるとしても、元国税局でソロバンをはじいていた素人の作品とは思えない立派なものであった。

常日頃、ひそかに抱いていた「高級ステレオ・デッキを一般大衆のもとへ」という夢が図らずも実弟の手づくりになるテープデッキを前にして勃然としてふくれあがった。これをもとに新会社を設立しようとして・・・、早速、電音、ヤマハと設計をともにしていた井上 丘氏と筆者にお声がかかった。

今まで放送用のテープレコーダーばかり手掛けていた目には、少々物足りなかったが、それでも目の前がぱっと明るくなったような気がしてモリモリとファイトがわいてくるのが判った・・・とメカ屋の井上氏は回想している。

谷兄弟から、このデッキで会社を設立してみようと思うという話を聞いて一番先にヤマハを飛び出したのは井上氏だった。筆者は残務の関係でやや遅れて4月1日から参加している。

会社は1956年(昭和31年)12月24日のクリスマス・イブに設立され、社名を東京電気音響(株)、ブランドはTEAC *3と決まった。常勤役員は谷兄弟と戸田氏の3名であった。戸田氏は、勝馬氏と高等工芸の同級生で、電音ではヘッドの製造を担当していた。TEACには1959年まで製造担当常務として在職していた。

工場はスポンサーの関係で墨田区千歳町に150坪ほどの敷地に100坪のウナギの寝床のような長い建物を借りることができた(写真 56-9)。設立したばかりの会社には、もったいない位広い工場で、夜はお化けでもでそうな程静かで、ガランとしていた。おまけに裏にお墓までそえてあるといった念の入れ方である。



写真 56-9 TEAC 千歳町工場 (1957 年)

1957 年 2 月、ともかく工場を見に行ったら。門は緑色の柱に焦げ茶色に塗られた扉、鬼が島のように、工場はところどころはげた木造の建物でお世辞にもきれいとはいえなかった。しかし、希望に燃えるわれわれにとってはすべてに張り合いがあった。

早速、井上氏は先の鞆馬氏作成の試作機を基に商品化を始めた。とにかく安くするためにモーター、リレー、ソレノイドなどメーカーと交渉したり、自作したりして、電音では経験したことのないコストとの闘いは並大抵ではなかった。

そして出来上がったのが TD - 102 型ステレオ・テープデッキである。第 1 号機は 4 月に完成した。さすが、谷さんの愛弟子、長年 (1949 年電音入社) 電音で鍛えあげた井上氏の設計だけあって、見違えるような洗練されたテープデッキになった。写真 56-10a と写真 56-10b は TD-102 型テープデッキ当初の取扱説明書に掲載されていた外観図で、井上氏直筆の青焼である。

注*4 Tokyo Electro Acoustic Company の略、1961 年までは「ティーク」と呼んでいた。

音響評論家の高城 重躬氏著「音の遍歴」(1974 年、共同通信社)に次のように書かれている⁽³⁴⁵⁾。

『谷 勝馬さん(現ティアック社長)が東京電気音響(株)を設立されたのが昭和 31 年だったろうか。

彼は一時日本楽器に席を置き、ヤマハプレーヤーなど開発していたが、この年に独立した。そして私たちが待望していた 3 ヘッド・3 モーター、2 トラック・ステレオ・テープレコーダーの開発を始めた。

この試作第 1 号機は弟さんの副社長 谷 鞆馬さんの作品である。これが現在私のところに保存されている。このデッキからだれが今日のティアックの隆盛を予想し得ただろう。全くの手作りで、神田あたりで買い集めた部品を使ったりしてどうひいき目に見ても商品にはなりそうもない。

しかし、それでもメカのツボはちゃんとおさえてあって、オモチャとはちがい、その後現れたプロ機の面影を十分備えている。このデッキもアンプはついていなかったから自作するより致し方なかった。いや自作したほうがよいものができるともいえる。発振コイルだけ分けてもらって、あとはアンペックスを手本に作った。苦心のすえ音は素晴らしくよくなり、テープマスターでは避け難かった濁りも完全にとれ、もうレコードを録音しながら再生に切り替えても、どちらか区別がつけがたいまでになった。

まもなくデッキでステレオ録音ができるようになった。ステレオになると録音の面白さは倍加される。当初マイクは三研の MS-2 を 2 本使っていた。この放送局規格品であるダイナミックマイクは性能もよく、これではいんなステレオ録音を始めた。

中略・・・

東京電気音響(株)(現ティアック)の 3 ヘッド 3 モーターを使うようになってからは、そういったメカニズム上の苦労はいっさいなくなった。それどころか試作品(前述)のあと市販された 102 型などあ

まりにも頑丈にできていた、いまだに廃物にならずに困っている。テープの方はモノラルからステレオ、そして4トラックと変わったが、このメカニズムはヘッドを交換するだけで、少しばかり操作の点での

不便さがまんすれば現在でも結構通用する。もう15年近くになるのに高校生の二男が現在なお使用しているほどである。

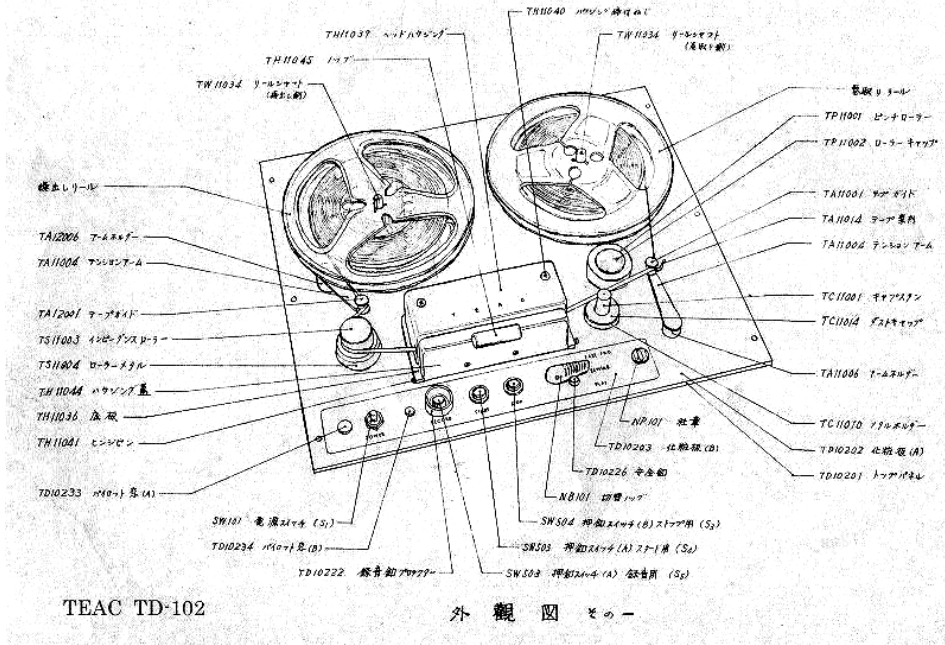


写真 56-10 (a) TEAC-102 型外観図(表面)

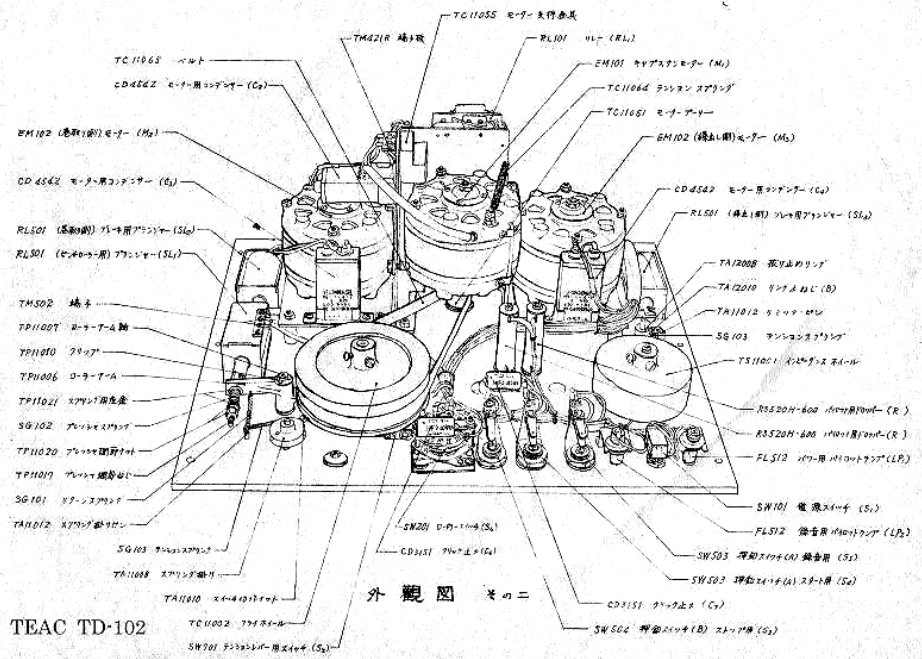


写真 56-10 (b) TEAC-102 型外観図(裏面)

平成 23 年度 通常総会報告

5 月度理事会報告

平成 23 年度 通常総会報告

平成 23 年 6 月 9 日(木)13 時 30 分より銀座プロッサムにおいて正会員 378 名中 261 名の出席 (委任状提出会員を含む)のもとに一般社団法人日本オーディオ協会としての第 1 回通常総会が開催されました。総会に引き続いて来賓を交えて懇親会が開催されました。

通常総会

平成 23 年度通常総会において次の 3 議案が提出され全て承認されました。

第 1 号議案 平成 22 年度事業報告・決算報告の承認を求める件

平成 22 年度事業報告・決算報告・監査報告が行われ承認されました。

続いて平成 23 年度事業計画・収支予算の説明と本年度の A&HT 展(音展)と DHT 認定講座の計画概要が紹介されました。

事業報告・決算報告・事業計画・収支予算の内容は本号の協会事業関連資料集に掲載しましたのでご覧下さい。

第 2 号議案 役員交代の承認を求める件

昨年の総会から今回までの間の役員交代が承認されました。

新任理事 鴨志田憲一郎

(ヤマハエレクトロニクスマーケティング株式会社)

新任理事・副会長 中村和彦(パナソニック株式会社)

新任監事 岡野憲策(パイオニア株式会社)

第 3 号議案 定款変更の承認を求める件

昨年の総会で承認された定款に対し、第 19 条の個人会員の議決権に関する内容変更について提案し、原案通り承認されました。

定款変更は特別議決案件のため、総正会員の議決権の 3 分の 2 以上の承認が必要ですが今回 261 名の出席(委任状提出会員を含む)があり、この条件を満たしたため本議案の承認は有効となりました。

変更後の定款は協会事業関連資料集に掲載しました。



通常総会 会場風景



校條会長の事業計画説明

懇親会

通常総会終了後、経済産業省 情報通信機器課長 吉本豊様、情報家電戦略室長 関根久様、情報通信機器課係長 佐々木将宣様をお迎えして懇親会が開かれ出席会員間の交流を深めました。

校條会長からのご挨拶に続いて来賓の吉本課長より東日本大震災で被災された方々へお見舞いが述べられ、このような状況だからこそ今年の A&HT 展を盛り上げ、被災された方々を励ますようにしてもらいたいとのご挨拶をいただきました。



吉本課長のご挨拶

5月理事会

平成 23 年 5 月 25 日に 5 月決算理事会・運営会議が理事 13 名、監事 2 名の出席のもと、日本オーディオ協会会議室で開催されました。

第 1 号議案 会長・副会長・専務理事の選任の件

4 月 1 日の一般社団法人日本オーディオ協会発足に際し法令に従い決められていた代表理事に代わり、定款に従い会長を選出するための互選が行なわれ、校條会長が再任されました。続いて加藤副会長、杉田副会長が再任され、専務理事は従来通り校條会長の兼務となりました。

第 2 号議案 役員交代の承認を求める件

続いて下記の役員交代が承認されました。

新任理事・副会長 中村 和彦 (パナソニック株式会社)

新任監事 岡野 憲策 (パイオニア株式会社)

退任理事・副会長 杉田 卓也 (パナソニック株式会社)

退任監事 角 喜久雄 (パイオニア株式会社)

第 3 号議案 新会員の承認を求める件

3 月理事会 (3 月 30 日) 以降 5 月 24 日までの間に申請のあったエムズシステムの法人賛助会員としての入会と個人会員 10 名の入会が承認されました。

有限会社 エムズシステム

代表取締役 三浦 光仁

所在地 中央区新富町 2 - 1 - 4

事業内容 波動スピーカーの開発、販売

6 月の通常総会に先立ち、以下の 3 議事の審議が行なわれ、通常総会に諮ることが承認されました。

第 4 号議案 平成 22 年度事業報告書案の承認を求める件

第 5 号議案 平成 22 年度収支計算書案の承認を求める件

第 6 号議案 平成 23 年度修正予算書の承認を求める件

JAS Information

協会事業関連資料集 1

平成 22 年度事業報告書

(平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで)

本協会は定款の目的に従い、豊かなオーディオ文化を広め、楽しさと人間性にあふれた社会を創造することを目指して、オーディオ及びオーディオ・ビジュアル(以下オーディオ等)に関する調査及び研究、普及及び啓発、基準の作成、情報の収集及び提供、展示会の開催、人材の育成、内外関係機関等との交流及び協力等、本協会の目的を達成するために必要な事業を実施しました。

平成 22 年度事業では感性価値創造を目指して、理事会機能の強化、各種委員会機能の強化、事務局機能の強化を図ることで普及・啓発活動を推進しました。

平成 23 年 4 月 1 日付けで一般社団法人としての移行登記を実施すべく準備を進め、あわせて理事の定員削減を含む定款の改定、会費徴収基準見直しを行い、来年の協会創立 60 周年に向けた新しい協会運営体制の強化を進めました。平成 22 年度に実施した主たる事業は、定款第 4 条各号に沿った通りであります。

また 3 月 11 日に発生した東日本大震災に被災された方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧、復興をお祈り申し上げます。日本オーディオ協会では被害にあわれた方々への出来る限りのご支援を実施していく所存です。

(第 1 号) オーディオ等に関するソフト、ハード、視聴環境の調査及び研究

デジタルホームシアター普及委員会において一般家庭におけるマルチチャンネルスピーカー配置の実態調査をもとに専門家による音場評価を加えることで日本市場に合ったホームシアターの為の音響的評価基準の研究を進めました。

また第三世代オーディオ普及委員会ではモバイルオーディオ推進協議会(MAPI)を通じて携帯端末を活用して家庭用オーディオ機器で音楽再生を行なうときの問題点の調査・検討に活用するための基準信号配信にむけた準備を進めました。

(第 2 号) オーディオ等に関する普及および啓発

5 月 1 日の「サラウンドの日」に(社)電子情報技術産業協会(JEITA)と協力し全国各地で「サラウンドの日」体感視聴会を開催しました。「音の日」には「音の匠」を顕彰し、「音の日試聴体験キャンペーン」も会員各社の協力により各地で開催しました。「オーディオ&ホームシアター展 TOKYO(音展)」では協会主催の各種セミナーや生録会を実施しました。音展期間中「音のサロン」では良い音楽を良い再生環境で楽しむためのライフスタイル提案を行ないました。また、青少年向けの啓発活動を音展アキバ及び横浜市において開催しました。

(第 3 号) オーディオ等に関する基準の作成

オーディオエンジニア及び一般カスタマーに向け、再生音の評価や測定に役立つ CD、DVD 等の頒布を行いました。

(第 4 号) オーディオ等に関する情報の収集及び提供

メール配信の会報 JAS ジャーナル 6 冊を発行しました。JAS ホームページは年間約 26 万ページビューの利用がありました。平成 22 年 4 月から新設したホームシアターサウンド Web はホームシアターに興味のあるお客様に具体的な情報を

提供するサイトとしてリニューアルし、年間約50万ページビューの利用がありました。

(第5号) オーディオ等に関する展示会開催

「オーディオ&ホームシアター展 TOKYO (音展 TOKYO)」を平成22年11月21日~23日に秋葉原 UDX と富士ソフトアキバプラザにて開催し、多くの方々にオーディオ等の最新情報と視聴体験機会を提供しました。

(第6号) オーディオ等に関する人材の育成

健全なホームシアター市場の普及に向け、ホームシアター関連の販売従事者、建築士、インテリアコーディネーター、インストーラー等に役立つデジタルホームシアター構築のガイドライン作成と人材の育成のための「デジタルホームシアター取扱技術者」資格認定講座を開設しました。

(第7号) オーディオ等に関する内外関係機関等との交流及び協力

第17回日本プロ音楽録音賞を関連団体と共催し、「音の日」に4部門10作品の制作技術者およびベストパフォーマーを表彰しました。

なお震災対応として経済産業省と連携し(1)経営再建へ向けた金融支援(2)同雇用調整助成金条件の緩和(3)風評被害調査(4)節電対策取組み(5)東北オーディオ店会傘下の販売店再建支援などを中心に震災対策情報第9号まで発信し、取り組んでいます。現在は文部科学省との連携で被災された学校にオーディオ機器、音楽CDを提供しています。

JAS Information

協会事業関連資料集 2

平成22年度収支計算書

(平成22年4月1日から平成23年3月31日まで)

収入の部

(単位:千円)

	平成22年度収入予算			平成22年度収入実績			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1 会費(含入会金)(1)	33,500	33,500		33,348	33,348		-152	-152	
2 事業収入	45,760	3,760	42,000	47,433	3,617	43,816	1,673	-143	1,816
普及・啓発 (2)	1,030	1,030		1,078	1,078		48	48	
評価用音源	730	730		631	631		-99	-99	
デジタルホームシアター (3)	2,000	2,000		1,908	1,908		-92	-92	
展示会(音展)	42,000		42,000	43,816		43,816	1,816		1,816
3 その他収入 (4)	500	500		807	807		307	307	
4 当期収入計(1~3)	79,760	37,760	42,000	81,588	37,772	43,816	1,828	12	1,816

- (注記) (1) 法人会員 正:20社、8団体、賛助24社、個人会員 一般:179名、シニア:121名、学生:1名、会友:46名 合計347名(平成23年3月31日現在)
 (2) 音の日会費、音の日行事分担金、サラウンドの日活動分担金
 (3) デジタルホームシアター技術者認定講座受講料・教本収入
 (4) サラウンドHP協力金(JEITA)、生録協賛金・参加料収入

支出の部

	平成22年度支出予算			平成22年度支出実績			差額		
	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (展示会)
1. 事業支出	49,007	10,495	38,512	51,067	12,593	38,474	2,060	2,098	-38
調査・研究									
普及・啓発 (1)	3,220	3,220		3,320	3,320		100	100	
基準の作成(音源) (2)	375	375		368	368		-7	-7	
情報の収集・提供 (3)	3,900	3,900		3,937	3,937		37	37	
展示会の開催(フェスタ)	1,512		(4) 1,512				-1,512		-1,512
展示会の開催(音展) (5)	37,000		37,000	38,474		38,474	1,474		1,474
人材の育成	2,000	2,000		(6) 3,968	3,968		1,968	1,968	
対外交流 (7)	1,000	1,000		1,000	1,000				
2. 管理費 (8)	9,100	9,100		9,749	9,749		649	649	
3. 事業管理費	23,100	18,100	5,000	24,045 (9)	19,045 (10)	5,000	945	945	
4. 当期支出計(1~3)	81,207	37,695	43,512	84,861	41,387	43,474	3,654	3,692	-38

収支バランス

5. 当期収支差額	-1,447	65	-1,512	-3,273	-3,615	342	-1,826	-3,680	1,854
6. 前期繰越収支差額	4,980	23,723	-18,743	4,980	23,723	-18,743			
7. 次期繰越収支差額	3,533	23,788	-20,255	1,707	20,108	-18,401			

- (注記) (1) 音の日行事、青少年イベント、サラウンドWG活動、デジタルホームシアター、MAPI等普及・啓発活動費用
 (2) オーディオシステム評価用ディスク制作、仕入代金等
 (3) ホームページ制作・運用費、ホームシアターサウンドWebリニューアル等
 (4) A&Vフェスタ 2009出展料金貸倒懸念債権
 (5) 音展(オーディオ&ホームシアター展)
 (6) デジタルホームシアター技術者認定講座
 (7) 他団体への協力金(日本プロ音楽録音賞運営委員会、デジタルコンテンツ協会、モバイルオーディオ推進協議会、インテリア産業協会)
 (8) 協会一般事業の管理経費 含む業務委託費
 (9) 一般会計事業に伴う固定的経費
 (10) 特別会計(展示会)事業活動に伴う固定的経費

平成 23 年度事業計画書

(平成 23 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日まで)

私たちは、永らく公益社団法人 日本オーディオ協会として活動してきましたが、いよいよ今期から、一般社団法人日本オーディオ協会として新たな道に踏み出そうとしています。そして来期には創立 60 周年という大きな節目を迎えることとなります。先人たちが築いたオーディオ文化ですが、国内市場は最盛期の 1/3 に縮小してしまいました。昨年はようやく長いトンネルを抜け、5 年ぶりに前年比を超えることができ、率直に評価します。

デジタル化と小型化は、勢い商品の性格を「質から機能」へと大きく転換してきました。この結果、生活スタイルは一変し、極めて利便性の高い生活ができるようになりました。一方で私たちは、多くのものを失ってきたことも事実です。時代の流れに対応するために、昨年は「変化と不変」を活動の原点に据え、法人見直しを行い、定款自体の変更も行いました。

今期も「変化と不変」と「感性価値の創造」を基本的な考え方として、新生日本オーディオ協会の初年度として、次代に継承すべき中期計画の策定を進めます。そして現状方針を検証し、整合性をとりながら 60 周年を期にスタートさせるための準備と、具体的な 60 周年記念事業を行ないます。

また、これを進めるためには喫緊の課題として健全な財政の裏付けと、国難とも言われる東北・関東大震災の影響把握と対応が必要です。現行運営状況を再度検証し、次代に耐えられるようしていきます。特に震災の影響は消費者の心理的状況も勘案して計画の具現化では慎重に対応していきます。

(1) デジタルホームシアター普及委員会

昨年は薄型テレビが 25,193 千台も出荷され、この内 30 インチ以上の構成比は 68.2%という驚異的な市場が構成されました。これに触発され、スピーカーシステムも一昨年に引き続き 118.3%の伸張というオーディオカテゴリー内トップの伸張となっています。これはホームシアター市場がいよいよ開花してきたものと認識できます。一方で、単純計算でも大型テレビ(30 インチ以上)へのスピーカーシステム装着率は僅か 3.5%に過ぎません。日本は住宅事情もありますが、米国と比べても極めて低いホームシアター市場といえます。

私たちはビジョンや基本的な考え方で表明しているとおり、オーディオと映像の融合を目指しています。リビングから専用ルームまで良質な音場空間構築に向けた健全なホームシアター市場の普及を目指しています。今期は本格的に日本オーディオ協会らしい技術的な裏付けを基にガイドラインの設置と、流通とタイアップした普及促進に向けた人材育成を進めます。

なお、これまで JEITA と共に活動してきたサラウンド・サウンド WG は、発展的解消をし、技術部会とともに、サラウンド・サウンド部会として普及に努めるものとします。

(2) 第三世代オーディオ普及委員会

昨年は MAPI 活動でモバイルオーディオ音源のあり方を検証し、標準信号設定など高度化を進めました。今期は、昨今の音源多様化状況を検証し、オ

オーディオ協会らしいパッケージのみでは無い新たな音源の確認と、ハード機器とのインターフェースのあり方を検証します。特にネット系配信音源については乱立状況であり、用語、呼称など消費者不信を招かないよう JEITA と共同で整理検証を進めます。

(3) ソフト普及委員会

昨年「オーディオ&ホームシアター展 TOKYO」において、プロ録音賞エントリー作品の試聴会と大学クラブによる高音質作品の試聴会を行ないました。今年度は引き続き、これらの開催と共に、さらに専門部会共催による試聴会を企画します。またホームシアターサウンド JP による高音質作品の紹介など高音質ソフトの発掘紹介、及び会員サービス強化に向けた推奨ソフトの頒布強化策の検討をします。さらに第三世代オーディオ普及委員会とも連携した、パッケージのみでは無い新たな音源の検証も進めます。

(4) 専門部会

前期は対応が弱かった専門企業向け対策として、専門企業が抱える課題の整理ができました。今期は課題解決に向け、具体的な活動を進めます。まずは良い音体験の場づくりをベースに、企業の技術研鑽と発表の機会としてセミナー、カンファレンスなどの開催を検討します。これらは「オーディオ&ホームシアター展 TOKYO」の中で具現化に努めます。また、原点に帰り、音の評価のあり方について、表現方法や用語について、消費者が分かりやすい使用方法など一定の考え方の整理に取り組みます。そして、新たに出現しているネット系オーディオや USB オーディオ等について、他団体とも協力の上、呼称や規格のあり方を検証していきます。

(5) 生録普及部会

これまで部会として、生録文化を復活させるべく生録会を4回開催し、認知浸透に努めてきました。昨年は、デジタルレコーダー分類で概ね120万台の出荷を見ることができ、一大カテゴリーに育ちまし

た。今までは、どちらかといえばマニア層による市場リードで先行してきましたが、今後は一般層にこの文化を広げる必要があります。それには、まだまだ誤解があるアーティストや著作権管理団体などとの協議が必要と考えます。ライブハウスやコンサートなどでの生録付チケットなど新市場開発を目指し、他団体等との協議の場の設置を検討します。また、生録されたソフトを自分用に活用するための編集とソフト作りのための技術セミナー等の開催も検討します。なお、これらを進めるために、現状の推進体制が適切かどうか検証していきます。

(6) 60周年プロジェクト

協会は来年度に設立60周年を迎えます。先人の業績を称え、次代に継承していくために、60周年に相応しい事業の検討と具現化を目指し、プロジェクトを立ち上げます。具体的内容は財政の裏付けを含め、プロジェクトにゆだねますが、50周年誌以降の編纂を基本に、少なくとも上期中にプラン策定を終え、下期には具現化を進めます。

(7) 音の日委員会

協会は他団体と協業し、1994年に「音の日」を制定し、1996年から「音の匠」を顕彰してきました。現在は「プロ録音賞」も共催し、着実に「音の文化」の認知拡大に努めてきました。今一度原点に帰り「音の文化」とは何かを見直し、60周年記念プロジェクトとも連動した「音の日」に相応しい事業を展開します。

(8) 展示会実行委員会

日本オーディオ協会発足の地である秋葉原に場所を移し、2回の展示会を開催しました。昨年は一昨年と違い、入場者も28,700人と113%の成果を上げることができました。また、単なる商品展示会から「試聴体験の場づくり」、「技術研鑽の場づくり」、「地産地消の場づくり」、「コミュニケーションの場づくり」などを掲げ、回遊型で展開してきました。

これは地元や出展者、消費者からも評価されつつあります。今期はさらにこれらに磨きをかけ、「新市場開発」、「企業化育成」、「ファンづくり」として協会の主力事業として会員企業全員参加で推進します。

(9) 広報委員会

これまで述べてきた事業計画を推進する上で欠かせないことは会員同士の情報共有と、消費者に対する認知拡大のための広報活動です。昨年はサラウンドサウンド JP を、ホームシアターサウンド JP に改め、アクセス件数の 144% 向上という大きな成果も出せました。また、JAS ジャーナルも苦しい財政事情ながら内容の見直しを図り、執筆者の拡大もあり、読者からの信頼性も上がりました。

今期は先ず理事企業から広報委員の選出をし、広報体制の強化を目指します。さらに、傘下に HP ワーキング会議を設置し、協会 HP の強化を目指します。具体的にはホームシアターサウンド JP や生録サイト、音展サイトなどの強化や会員サービス強化策など、実の上がる対策を検討していきます。

JAS Information

協会事業関連資料集 4

平成23年度収支予算書

(平成23年4月1日から平成24年3月31日まで)

収入の部

(単位:千円)

	平成22年度収入実績				平成23年度収入予算案				差額			
	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)
1. 会費(含入会金) (1)	33,348	33,348			33,000	33,000			-348	-348		
2. 事業収入	47,433	1,709	1,908	43,816	48,292	1,400	8,892	38,000	859	-309	6,984	-5,816
普及・啓発 (2)	1,078	1,078			800	800			-278	-278		
評価用音源	631	631			600	600			-31	-31		
認定講座 (3)	1,908		1,908		8,892		8,892		6,984		6,984	
展示会(音展)	43,816			43,816	38,000			38,000	-5,816			-5,816
3. その他収入 (4)	807	807			700	700			-107	-107		
4. 当期収入計(1~3)	81,588	35,864	1,908	43,816	81,992	35,100	8,892	38,000	404	-764	6,984	-5,816

(注 (1) 法人会員 正:20社、8団体、賛助24社、個人会員 一般:179名、シニア:121名 学生:1名 会友:46名 合計347名 (平成23年3月31日現在))

(2) 音の日会費、音の日行事分担金(JAPRS)、サラウンドの日活動分担金

(3) デジタルホームシアター技術者認定講座 受講料・教本収入

(4) サラウンドHP協力金(JEITA)、生録協賛金・参加料収入

支出の部

	平成22年度支出実績				平成23年度支出予算案				差額			
	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)	合計	一般会計	特別会計 (認定講座)	特別会計 (展示会)
1. 事業支出	51,067	8,625	3,968	38,474	47,062	6,992	7,570	32,500	-4,005	-1,633	3,602	-5,974
調査・研究												
普及・啓発 (1)	3,320	3,320			3,450	3,450			130	130		
基準の作成(音源)(2)	368	368			442	442			74	74		
情報の収集・提供(3)	3,937	3,937			2,100	2,100			-1,837	-1,837		
展示会(音展) (4)	38,474			38,474	32,500			32,500	-5,974			-5,974
認定講座 (5)	3,968		3,968		7,570		7,570		3,602		3,602	
対外交渉 (6)	1,000	1,000			1,000	1,000						
2. 管理費 (7)	1,038	1,038			1,830	1,830			792	792		
3. 事業管理費	32,756	27,756		5,000	33,020	27,520		5,500	264	-236		500
4. 当期支出計(1~3)	84,861	37,419	3,968	43,474	81,912	36,342	7,570	38,000	-2,949	-1,077	3,602	-5,474

収支バランス

5. 当期収支差額	-3,273	-1,555	-2,060	342	80	-1,242	1,322	0	3,353	313	3,382	-342
6. 前期繰越収支差額	4,980	23,723		-18,743	1,707	22,168	-2,060	-18,401				
7. 次期繰越収支差額	1,707	22,168	-2,060	-18,401	1,787	20,926	-738	-18,401				

(注 (1) 音の日行事、青少年イベント、サラウンドWG活動、デジタルホームシアター、MAPI等普及・啓発活動費用)

(2) オーディオシステム評価用ディスク制作、仕入代金等

(3) ホームページ制作・運用費等

(4) 音展(オーディオ&ホームシアター展)

(5) デジタルホームシアター技術者認定講座

(6) 他団体への協力金(スタジオ協会、デジタルコンテンツ協会、モバイルオーディオ推進協議会、インタ産業協会)

(7) 協会一般事業の管理経費

(8) 一般会計事業に伴う固定的経費(非常勤業務委託者の委託料・経費を含む)

(9) 特別会計(展示会)事業活動に伴う固定的経費

JAS Information

協会事業関連資料集 5

一般社団法人 日本オーディオ協会 平成23年度 役員名簿

(平成23年7月1日現在 50音順)

1	会長	校條 亮治	パイオニア株式会社
2	副会長	加藤 滋	ソニー株式会社
3	副会長	中村 和彦	パナソニック株式会社
	専務理事	校條 亮治	会長兼務
4	理事	穴澤 健明	個人会員代表(株式会社ビットメディア)
5	理事	市川 博文	株式会社ディーアンドエムホールディングス
6	理事	岡田 守行	シャープ株式会社
7	理事	鴨志田 憲一郎	ヤマハエレクトロニクスマーケティング株式会社
8	理事	岸原 孝昌	一般社団法人モバイル・コンテンツ・フォーラム
9	理事	君塚 雅憲	個人会員代表(東京芸術大学)
10	理事	小嶋 康	ラックスマン株式会社
11	理事	高松 重治	アキュフェーズ株式会社
12	理事	徳重 浩	ティアック株式会社
13	理事	中西 康之	三菱電機株式会社
14	理事	西 國晴	個人会員代表(パイオニアマーケティング株式会社)
15	理事	畑 陽一郎	一般社団法人日本レコード協会
16	理事	濱崎 公男	(NHK放送技術研究所)
17	理事	藤川 晋也	日本ビクター株式会社
18	理事	松下 和雄	株式会社オーディオテクニカ
19	理事	森 芳久	個人会員代表
20	理事	渡辺 隆志	株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント

監事	相澤 宏紀	個人会員代表
監事	岡野 憲策	パイオニア株式会社

顧問	鹿井 信雄	
顧問	中島 平太郎	
顧問	坊上 卓郎	
顧問	藤本 正熙	

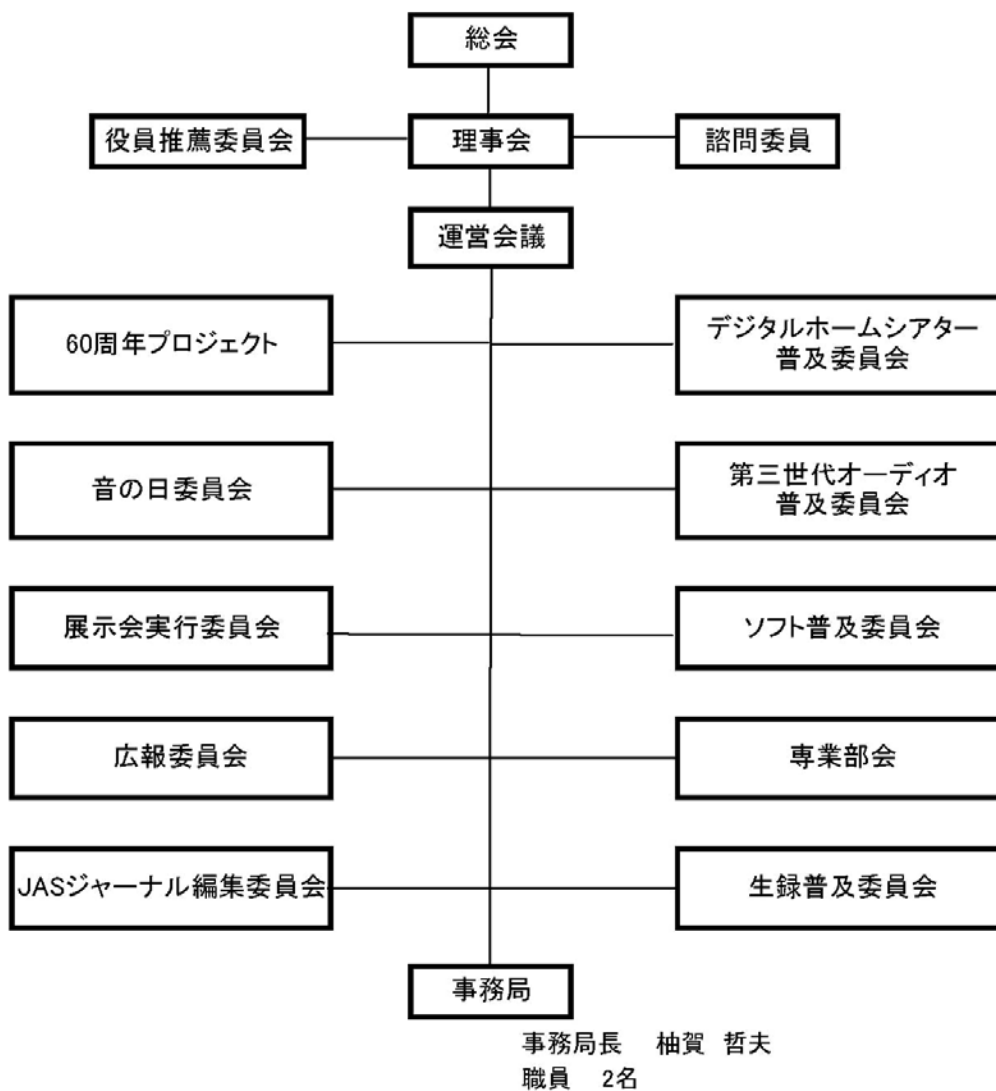
諮問委員	内沼 映二	株式会社ミキサーズ・ラボ
諮問委員	齋藤 重正	アキュフェーズ株式会社
諮問委員	沢口 真生	パイオニア株式会社技術顧問
諮問委員	鈴木 弘明	株式会社ソナ
諮問委員	橘 秀樹	千葉工業大学
諮問委員	谷口 好市	朝日無線電機株式会社
諮問委員	豊島 政実	四日市大学
諮問委員	袴 俊雄	ビクターエンタテインメント株式会社
諮問委員	松田 賢一	株式会社メディアコミュニケーション
諮問委員	宮坂 榮一	東京都市大学
諮問委員	八幡 泰彦	日本プロフェッショナルオーディオ協議会
諮問委員	山崎 芳男	早稲田大学

協会事業関連資料集 6

平成 23 年度 協会組織図

(平成 23 年 7 月 1 日現在)

会長	校條 亮治
副会長	加藤 滋
	中村 和彦
専務理事	校條 亮治 (兼務)
ほか 理事	17名
監事	2名
顧問	4名



JAS Information

協会事業関連資料集 7

一般社団法人 日本オーディオ協会 定款

平成 23 年 7 月 1 日現在

前 文

この定款は 1952 年に日本オーディオ協会が設立された趣旨である「可聴音・高忠実度録音及び再生の飽くなき追求」と、それをとおして再生音楽文化、即ちオーディオ文化を広め、楽しさと人間性にあふれた社会を創造するために、日本オーディオ協会の活動の基本を定めたものである。

第 1 章 総則

(名称)

第 1 条 この法人は、一般社団法人日本オーディオ協会(英文名: JAPAN AUDIO SOCIETY、略称 JAS) という。

(事務所)

第 2 条 この法人は、主たる事業所を東京都中央区に置く。

第 2 章 目的及び事業

(目的)

第 3 条 この法人は、音及び音楽を中心とした感性価値向上の立場から、オーディオシステム及びオーディオビジュアルシステム(以下オーディオ等)に関するソフト、ハード、並びに視聴環境の調査及び研究、啓発、普及、更に基準の作成、人材の育成、情報の収集提供、展示会の開催などを内外関係機関等との交流・協力により推進することにより、オーディオ等文化の向上と関係分野の発展を図り、もって我が国経済の発展と生活文化の向上に寄与することを目的とする。

(事業)

第 4 条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) オーディオ等に関するソフト、ハード、視聴環境の調査及び研究
- (2) オーディオ等に関する普及及び啓発
- (3) オーディオ等に関する基準の作成
- (4) オーディオ等に関する情報の収集・分析及び提供
- (5) オーディオ等に関する展示会及び啓発に関する催事の開催
- (6) オーディオ等に関する人材の育成
- (7) オーディオ等に関する内外関係機関との交流及び協力
- (8) オーディオ等に関するソフト、ハード及び出版物の制作及び販売

- (9) 前各号に掲げるもののほか、前条の目的を達成するために必要な事業
- 2 前項の事業は、日本国内において行うものとする。

第3章 会員

(法人の構成員)

第5条 この法人の社員たる構成員は、以下の会員の名称(以下「会員」という。)をもって構成し、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下「一般社団・財団法人法」という。)上の社員とする。

- 2 正会員は、本会の目的に賛同して入会する、オーディオ等に関する事業を営む法人、及び法人登記済みのオーディオ等関係団体、並びにオーディオ等に関する専門知識を有する個人とし、自ら協会ビジョン達成のために活動するものをいう。
- 3 賛助会員は、本会の目的に賛同して入会する、オーディオ等に関する事業を営む法人、及びオーディオ等関係団体、並びに協会のビジョンに共感する満16歳以上の学生(大学院生、大学生、専門学校生、高校生)とし、それぞれ協会ビジョン達成に努力するものをいう。

(会員資格の取得)

第6条 この法人に入会を希望するものは、所定の入会申込書を会長に提出し、理事会の承認を得なければならない。

- 2 法人又は団体たる会員にあっては、法人又は団体の代表者として本会に対してその権利を行使する一人のもの(以下「会員代表者」という。)を定め、会長に届けなければならない。
- 3 この法人に入会を希望し、理事会において承認を受けたものは別に定める入会金を速やかに納入しなければならない。なお、入会金は総会において別に定めるものとする。
- 4 会員代表者を変更した場合は、速やかに別に定める変更届を会長に提出しなければならない。

(会費の負担)

第7条 この法人の事業活動に経常的に生じる費用に当てるため、会員になったとき及び毎年、会員は別に定める額を、別に定める規則に則り、会費として支払う義務を負う。

- 2 会費の額及び規則は、総会において別に定める。

(会員の誠実義務)

第8条 会員になったものは、この法人の事業遂行に誠実に努めなければならない。

(退会)

第9条 会員が本会を退会しようとするときは、別に定める退会届を会長に提出することにより、いつでも退会することができる。

- 2 会員が次の各号の一つに該当するときは、退会したものとみなす。
- (1) 制限行為能力者の審判を受けたとき。
- (2) 個人会員本人が死亡したとき。
- (3) 法人又は団体が解散したとき。

- (4) 総社員の同意があったとき。
- (5) 除名されたとき。
- (6) 定款で定めた事由の発生があったとき。

(除名)

第10条 会員が次の各号の一つに該当するときは、正会員は総会により、一般社団・財団法人法の定めにより、除名することができる。なお、賛助会員は理事会の決議により、除名することができる。

- (1) 会費を督促するも滞納したとき。
- (2) この法人の定款又は規則に違反したとき。
- (3) この法人の名誉を毀損したとき、又はこの法人の目的に反する行為をしたとき。
- (4) 正当な事由なく第8条の義務に違反したとき。

2 前項の規定により会員を除名する場合は、当該会員にあらかじめ通知するとともに、除名の議決を行う総会及び理事会において、当該会員に弁明の機会を与えなければならない。

(会員資格の喪失)

第11条 会員は、第9条又は前条の規定のほか、次のいずれかに該当するに至ったときは、その資格を喪失する。

- (1) 第7条の支払い義務を1年以上履行しなかったとき。
- (2) 当該会員法人が解散したとき。

(入会金、会費及びその他の拠出金の返還)

第12条 既納の入会金及び会費又はその他の拠出金は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(会員名簿)

第13条 この法人は、会員の氏名または名称及び住所を記載した会員名簿を作成し、この法人の主たる事務所に備え置くものとする。

- 2 この法人の会員に対する通知又は督促は、会員名簿に記した住所又は会員がこの法人に通知した居所に宛てて行うものとする。
- 3 会員は、この法人の業務時間内はいつでも会員名簿を閲覧、又は謄写することができる。
- 4 当該請求を行う会員がその権利の確保、又は行使に関する調査以外の目的等、一般社団・財団法人法に定める除外該当項目に抵触する場合は、この法人は前項を拒むことができる。

第4章 総会

(構成)

第14条 総会は、正会員をもって構成する。ただし、賛助会員の出席及び意見表明を拒むものではない。

- 2 前項の総会をもって一般社団・財団法人法上の社員総会とする。

(権限)

第15条 総会は、次の事項について決議する。

- (1) 会員の除名
- (2) 理事及び監事の選任又は解任
- (3) 常勤の理事及び監事の報酬等の総額
- (4) 貸借対照表及び損益計算書(正味財産増減計算書)の承認
- (5) 定款の変更
- (6) 解散及び残余財産の処分
- (7) 入会金及び会費徴収基準
- (8) 理事会において必要と認められた事項
- (9) その他総会で決議するものとして、法令又はこの定款で定められた事項

(開催)

第16条 総会は、定時総会として毎年6月に開催するほか、必要がある場合に臨時総会を開催する。

(招集)

第17条 総会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき会長が招集する。

- 2 会長は、正会員の議決権の5分の1以上から総会の目的事項、及び招集の理由を示して総会の招集を請求された場合には、その請求があった日から3週間以内に臨時総会を招集しなければならない。
- 3 総会の招集は、少なくとも開催日の2週間前に、その総会の目的事項、日時、場所及びその他法令で定められた事項を記載した文書をもって通知する。

(議長)

第18条 総会の議長は、会長がこれに当たる。ただし、前条2項により総会の請求があった場合においては、出席正会員のうちから議長を選出する。

(議決権)

第19条 総会における議決権は正会員1名につき1個とする。ただし、個人正会員においては特別議決案件のみ議決権を有するものとする。

(決議)

第20条 総会の決議は、正会員の議決権の過半数を有する正会員が出席し、出席した当該正会員の議決権の過半数をもって行う。

- 2 前項の規定にかかわらず、次の決議は総正会員の半数以上であって、総正会員の議決権の3分の2以上の多数をもって行う。
 - (1) 正会員の除名
 - (2) 監事の解任
 - (3) 定款の変更
 - (4) 解散
 - (5) その他法令で定められた事項

(書面等による議決権の行使)

第21条 総会に出席できない正会員は、書面又は電磁的方法、若しくは代理人をもって議決権を行使することができる。ただし、代理人は代理権を証明する書類を当法人に提出しなければならない。

(議事録)

第22条 総会の議事については法令の定めるところにより、議事録を作成する。

2 議長及び当該総会において出席した正会員のうち、選任された2名の議事録署名人は前項の議事録に署名または記名押印しなければならない。

第5章 役員

(役員を設置)

第23条 この法人に、次の役員を置く。

- (1) 理事 15名以上20名以内
- (2) 監事 3名以内
- 2 理事のうちにはそれぞれの理事について、当該理事と次の各号で定める特殊の関係がある者である理事の合計数が、理事総数の3分の1を超えて含まれることにはならない。
 - (1) 当該理事の配偶者
 - (2) 当該理事の三親等以内の親族
 - (3) 当該理事と婚姻の届出をしていないが、事実上の婚姻関係と同様の事情にある者
 - (4) 当該理事の使用人
 - (5) 前各号に掲げる者以外の者で、当該理事から受ける金銭その他の資産によって生計を維持している者
 - (6) 第3号に掲げる者と、生計を一にするこれらの者の配偶者、又は三親等以内の親族、その他特別の関係にある者
- 3 理事のうち1名を会長とする。
- 4 前項の会長をもって一般社団・財団法人法上の代表理事とする。
- 5 会長以外の理事のうち4名以下を副会長とする。
- 6 会長、副会長以外の理事のうち、1名を専務理事とする。ただし、理事会の承認により、会長及び副会長がこれを兼務することを認める。
- 7 専務理事は、理事会の承認により、事務局長を兼務することを認める。
- 8 第6項の専務理事をもって一般社団・財団法人法第91条第1項第2号の業務執行理事とする。

(役員を選任)

第24条 理事及び監事は、正会員の代表者、又は代表者の委嘱を受けた代表登録者、及び正個人会員並びに学識経験者中より総会の決議により選任する。この場合、非会員であっても理事は2名以内、監事においては1名を限度に、前条第1項第1号の内数として、総会の決議により選任することができる。

- 2 会長、副会長、専務理事は理事の中から理事会の決議により選定する。

(役員等に欠員が生じた場合の措置)

第 25 条 この法人の役員が、定款で定めた人数に対し、欠員が生じた場合は、一般社団・財団法人法第 75 条の定めによるものとする。

(理事の職務及び権限)

第 26 条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。

- 2 会長は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、その業務を執行し、副会長は、会長を補佐し、専務理事は理事会において別に定めるところにより、この法人の業務を執行する。
- 3 会長、専務理事は、3 ヶ月に 1 回以上、自己の職務の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務及び権限)

第 27 条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令の定めるところにより監査報告を作成する。

- 2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、この法人の業務、及び財産の状況の調査をすることができる。

(役員任期)

第 28 条 理事、及び監事の任期は、選任後 2 年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時総会の終結の時までとする。ただし再任を妨げない。

- 2 補欠として選任された、理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。
- 3 理事又は監事は、第 23 条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての、権利と義務を有するものとする。

(役員報酬)

第 29 条 理事及び監事は、無報酬とする。ただし常勤の理事及び監事については、総会において定める総額の範囲内で、総会において別に定める報酬等の支給基準に従って算定した額を報酬等として支給することができる。

(役員解任)

第 30 条 理事及び監事は、総会の決議によって解任することができる。

第 6 章 顧問及び諮問委員

第 31 条 この法人に、顧問並びに諮問委員を若干名置くことができる。

- 2 顧問は、理事経験者から理事会の決議によって会長が委嘱する。
- 3 顧問は、この法人の運営に関して、会長の諮問に応ずる。
- 4 諮問委員は、理事経験者及び学識経験者から、理事会の決議によって会長が委嘱する。
- 5 諮問委員は、この法人の業務執行に関して、理事会の諮問に応ずる。

第7章 理事会

(理事会及び構成)

- 第32条 この法人は、理事会を置くものとする。
2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(理事会の権限)

- 第33条 理事会は、次の職務を行う。
(1) この法人の業務執行の決定
(2) 理事の職務の執行の監督
(3) 会長、副会長、専務理事の選定及び解職

(開催)

- 第34条 理事会は、3ヶ月に1回の割合で年4回以上開催する。

(招集)

- 第35条 理事会は、法令に別段の定めがある場合を除き、会長が招集する。ただし、会長が欠けたとき、又は会長に事故があるときは副会長が理事会を招集する。
2 前項にかかわらず、理事は前項に示した招集権者に対し、理事会の目的である事項を示して、理事会の招集を請求することができる。

(招集の手続き)

- 第36条 理事会の招集は、開催日の1週間前までに理事会の目的事項、日時及び場所等を明示した電磁的方法、若しくは文書をもって各理事、及び監事に通知しなければならない。

(議長)

- 第37条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。ただし会長が欠けたとき、若しくは会長に事故があるときは副会長がこれに当たる。

(決議)

- 第38条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
2 前項の規定にかかわらず、一般社団・財団法人法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

- 第39条 理事会の議事については、一般社団・財団法人法第95条、第96条及び第98条の定めにより、議事録を作成する。
2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に記名押印しなければならない。

第8章 委員会

(委員会)

- 第40条 この法人の事業を推進するために必要があるときは、理事会の決議により、委員会を設置することができる。
2 委員会は、委員をもって構成する。
3 委員は、会員のうちから理事会が選び、会長が委嘱する。ただし、事業推進のため

に必要と認められるときは、学識経験者等非会員にあっても委嘱することができる。

- 4 委員会は、当該事項を調査、研究、審議し、事業を円滑に推進するとともに、会長及び専務理事に報告する。
- 5 委員会に関する必要な事項は、理事会の決議により別に定める。

第9章 資産及び会計

(事業年度)

第41条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(事業計画及び収支予算)

第42条 この法人の事業計画書、収支予算書については、毎年事業年度の開始の前日までに、会長が作成し、理事会の承認を経なければならない。なお、これを変更する場合も同様とする。

- 2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間、備え置くものとする。

(事業報告及び決算)

第43条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時総会に提出し、第1号及び第2号の書類についてはその内容を報告し、第3号から第4号までの書類については承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告書
- (2) 事業報告の附属明細書
- (3) 貸借対照表
- (4) 損益計算書(正味財産増減計算書)

- 2 前項の書類のほか、監査報告書を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款、会員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。

第10章 基金

(基金の募集)

第44条 この法人は、基金を引き受ける者の募集をすることができる。

- 2 この法人の、基金の募集、割り当て及び払い込み等の手続きについては、理事会が決定する。

(基金の拠出者の権利)

第45条 この法人の基金は、この法人が基金拠出者と合意した期日までは返還しない。

- 2 拠出者より払い込み、又は給付のあった基金は、当該拠出者からの預金とし、この定款の定めに従って拠出者に返還される。
- 3 基金の返還にかかる債権には、利息を付さない。
- 4 基金の拠出者は、基金の返還にかかる債権を理事会の承認なしに、他に譲渡し、又は担保に供してはならない。

5 基金の拠出者は、この法人の運営についての議決権、その他の権限を有するものではない。

6 基金の拠出者は、この法人の会員たる地位を兼ねることができる。

(基金の返還手続き)

第46条 基金の拠出者に返還する基金の総額については、定時総会の決議を経た上、一般社団・財団法人法第141条第2項に規定する限度額の範囲で行うものとする。

第11章 定款の変更及び解散

(定款の変更)

第47条 この定款は、総会の決議によって変更することができる。

(解散)

第48条 この法人は、総会の決議、その他法令で定められた事由により解散する。

(残余財産の帰属)

第49条 この法人の清算に伴う残余財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人、又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

(剰余金)

第50条 この法人は、剰余金の分配を行わない。

第12章 事務局

(事務局)

第51条 この法人は、事業及び事務を円滑に推進するために事務局を置き、別の定めにより運営する。

2 事務局には、所要の職員を置くものとする。

3 事務局長は、理事会の決議を経て会長が任免する。

4 事務局長以外の職員は、会長が任免する。

5 職員は、有給とする。

6 職員の給与は、会長が定める。

第13章 公告の方法

(公告方法)

第52条 この法人の公告は、この法人の主たる事務所の公衆の見やすい場所に掲示する方法により行う。

第14章 補則

(実施細則)

第53条 この定款の実施に関して必要な事項は、理事会の決議をもって別に定める。

附 則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（以下「整備法」という）第 121 条第 1 項において、読み替えて準用する同法第 106 条第 1 項に定める、一般法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 社団法人日本オーディオ協会の会員である者は、第 6 条の規定にかかわらず、一般社団法人の設立登記の日に、この法人の会員になった者とみなす。
- 3 この法人の最初の代表理事は、校條亮治とする。
- 4 整備法第 121 条第 1 項において読み替えて準用する同法第 106 条第 1 項に定める特例民法法人の解散の登記と、一般社団法人の設立の登記を行ったときは、第 42 条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。

以上

JAS Information

東日本大震災支援について

日本オーディオ協会 事務局

今回の東日本大震災により被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

3月11日に発生した東日本大震災を受け、理事企業、会員企業とともに、日本オーディオ協会としてどのような支援活動が受け入れ側にとって価値があるかを検討し、その結果、被災された小、中学校にオーディオ機器を提供することで、よい音を聴いて気持ちをリフレッシュしていただきたいと願って今回の提案を行なうことにしました。

被災地では音楽CDも不足していることが考えられるのでオーディオ機器に加えて音楽CDも提供することとして理事企業、会員企業に協力を要請しました。

その結果日本オーディオ協会会員各社から多数のミニコンポ、CDラジカセ、DVDプレーヤーさらに音楽CDを提供していただく事が出来、以下の学校関係者に送らせていただきました。

経済産業省経由で連絡のあった被災者生活支援特別対策本部経由で被災された東北3県の災害対策本部に上記支援策を連絡し、さらに文科省「子どもの学び支援ポータルサイト」にラジカセ、ミニコンポ、DVDプレーヤーの支援について掲示して、以下の学校から協力要請を受け、各々に希望するシステムと音楽CDを合わせて寄贈しました。

宮城県登米市教育委員会
宮城県気仙沼市立小原木小学校
宮城県気仙沼市立馬籠小学校
宮城県石巻市支援団体「やっぺす石巻」
宮城県山元町立山下中学校
宮城県東松島市立浜市小学校
宮城県東松島市立鳴瀬第一中学校
岩手県下閉伊郡山田町立大沢小学校
岩手県大槌町大槌北小学校

上記学校以外の支援として、東北オーディオ専門店会経由で救済要請のあった大船渡市オーディオショップ菅生様に対し、店舗再建の為の支援としてカタログ展示台を提供しました。

一般社団法人日本オーディオ協会では震災で被災された人々への支援を継続していく所存です。会員各位のご協力をお願いします。

以下、提供先からの反響をご紹介します。

1. 気仙沼市立小原木小学校 熊谷良市校長からのメッセージと写真

このたび文部科学省「子どもの学び支援ポータルサイト」を通して「ミニコンポ」(1台)「音楽CD」(5枚)を支援提供いただき、大変ありがとうございました。

3月11日に派生した東日本大震災から早いもので3ヶ月が経とうとしています。雪が冷たく舞っていた震災の日から、今では新緑がまぶしい季節へと移り変わっています。時の経つのは早いものです。しかし、瓦礫が野積みされている地域の実態を毎日見るにつけ、復興が中々進まない現実に正直落胆もしています。

4月21日から今年度の教育活動が始まり、子どもたちも、震災被災による悲しさ・つらさを心の奥に隠しながらも、元気に一生懸命学校生活を送っています。

送っていただきました「ミニコンポ」は音楽室の大型テレビの下に設置し、映像と音楽で子どもたちの心のリフレッシュに大切にに使わせていただきます。来る6月12日(日)に開催します「防災教室」(学習参観日・「子どもの心のケア」と題した教育講演会と親子のふれあい活動)の親子で歌を歌ったり運動を楽しんだりする活動の中できっと大きな威力を発揮してくれるものを期待しています。本当にありがとうございます。

今回の震災被災を通して全国各地の数多くの方々が私たちの悲しみや苦しみを心の底から自分のこととして深く理解・共感してくださり、支えてくださっていることに深く感謝するとともに日本国民として見えない強い糸で結ばれていることに、ただただ感動するばかりです。

復興の兆しが見え出したとはいえ、まだまだ不自由な生活はこれから先も続くと思われま。しかし全国の数多くの方々の暖かい支援を心の支えとして明るく力強く「明日」という明るい未来に向かって前進していきたいと思ひます。多くの人々に感謝しながら一生懸命勉強に取り組むことがこれまでの多くの支援に対する私たちのお礼と考えます。

改めて御礼が大変遅くなりましたこととお詫びするとともに、貴協会の皆様からのお励ましとご支援に感謝申し上げます。



2. 宮城県山元町立山下中学校 上西教諭からのメッセージと写真

このたびは、素晴らしいミニコンポを3台も頂きまして、本当にありがとうございました。早速、2台を設置し、活用を始めましたので写真にてお知らせ致します。機材のレベルも高く、とても美しい音楽を響かせております。同時にご提供頂いたCDも選りすぐりで、分かりやすく、生徒共々喜びながら聴いております。節電等の影響もあり、首都圏といえどもなかなか本来の生活を送ることが出来ないと同っております。

これからも、オーディオ機器を通しての音楽的な啓蒙の役割を担い、頑張ってもらいたいと存じます。



3. 岩手県山田町立大沢小学校 大久保裕明校長からのメッセージと写真

- この度の東日本大震災に際しまして、ご支援のお声をかけていただいたこと、また多大なる支援物資をいただいたこと、心から感謝申し上げます。
- 震災時、本校の児童は、学校の教育活動中であつたことが幸いし、全員無事でしたが、避難している校庭から見える現実とは思えない出来事やそれに伴うライフラインの停止、多数の避難者との生活、そして寒さと疲れなどが重なり、経験したことのない不安を抱いていたことと思います。
- そのような中、多くの方々から集まる支援物資は、質的なものを満たしてただけでなく、自分たちを支えてくださっている多くの方々の支援の「心」を感じることができ、それによって児童もたくさん励まされ、現在は、一人も休むことなく元気に登校し学校生活を送っています。
- まだまだ、復興までの道のりは長く、児童も不安定な生活を続けることになりましたが、支援してくださっている「心」を原動力とし、山田の町の復興を担う児童の育成ために、精一杯努力するつもりです。今後ともご支援のほどお願い申し上げます、お礼の挨拶といたします。この度はありがとうございました。



4. 東松島市立浜市小学校 渡辺孝之教務主任からのメッセージと写真

過日は、ミニコンポとDVDプレーヤーをお送りいただきありがとうございました。

皆様からお送りいただきましたオーディオの使用状況の写真をお送りいたします。

ミニコンポは6年生教室と図書室に置き、朝の歌や音楽の時間、英語の時間などに活用しています。写真は1年生の英語の時間です。

DVDプレーヤーは特別支援学級に1台置き、もう1台は行事等で使うようにしています。写真は全校でビデオを見たときの様子です。終わったあとにみんなで撮りました。

少しでも雰囲気をお汲み取りいただければと思います。

援助いただきました会員企業の皆様どうぞよろしくお伝えください。

